

日本の精神と中村雄二郎の「リズム論」

平成27年7月14日

国土政策研究所

会長 岩井國臣

はじめに

私たち日本人は自己主張しない国民だといわれる。この国際化の時代に、外国人との付き合いが増えていくが、自分の意見を持たない、あるいは持っていてそれをほとんど言わない、そういう私たち多くの日本人は多分外国人に馬鹿にされるか、馬鹿にされなくとも尊敬されない。

例えば、西洋人との付き合いで、貴方の宗教は何かと問われた時、多くの日本人は仏教とか神道と答えるだろう。そして、仏教とはお釈迦さんの教えであると説明するであろうし、神道とは日本において古代から信仰されてきた宗教で、八百万の神がいる多神教であると説明するだろう。それらは間違いではないが、仏教や神道の世界性を説明しない限り、西欧人にはやはり理解されないであろうし馬鹿にされなくとも尊敬されないであろう。

私たち日本人は、歴史的にずっと仏教や神道を信仰してきて、日本の精神を作ってきている。日本の精神とは何か？ ひと言で言えば、「脱主体化」、すなわち自己主張しないことである。それが何故立派なことであるのか、西欧人には理解されなくとも、今後は、私たち日本人はそれを十分理解した上で、西欧人に判ってもらう努力をする必要がある。

この「日本の精神」に関する哲学としては、佐伯啓思のいうとおりにかつての西田幾多郎の「無の思想」があるが、比較的最近のものとしては、私の尊敬する中村雄二郎の「リズム論」がある。佐伯啓思や呉善花は中村雄二郎の「リズム論」にはまったく触れていないので、私は、以下において中村雄二郎の「リズム論」について詳しく述べていきたい。ここでは、中村雄二郎の「リズム論」の世界性を述べることになる。また、佐伯啓思が「日本の精神」との関連で触れている「無」についても、その世界性を述べるとともに、中村雄二郎の「リズム論」と西田幾多郎の「無の思想」との繋がりを明らかにするつもりだ。

佐伯啓思のアメリカに対する認識は、アメリカは世界をリードする文明的な力を失っているというものである。そういう基本的な認識のもとで、彼は、今後、世界はますます不安定になっていくであろうと述べている。そのことについて、佐伯啓思はその著『増補版「アメリカニズム」の終焉 シヴィック・リベラリズム精神の再発見へ』（1998年9月、TBSブリタニカ）又は「アメリカニズム」の終焉（2014年10月、中央公論新社）をご覧いただきたい。2014年版には「シヴィック・リベラリズム精神の再発見へ」というサブタイトルは外されているが、本の基本的な内容が変わっている訳ではなく、2014年版も「シヴィック・リベラリズム精神の再発見」を目指したものであることに変わりはない。

「シヴィック・リベラリズム」とは、「共和国の自由」という意味で、近代市民社会の個人的な自由とは違っている。佐伯啓思は「シヴィック・リベラリズム」に関して次のように言っている。すなわち、

『 「共和国の精神」にしる「シヴィック・リベラリズム」にしる、もともとは古代ギリシャのポリスから始まり、ルネッサンスをへて近代ヨーロッパの（とりわけ二つの革命をへたイギリスの）精神の底流をなしてきたもの。それは、すぐれて「ヨーロッパ的なるもの」であった。アメリカにそれが移植されたのは、すでに述べたように、憲法の起草者たちにとっては「合衆国」の建設はヨーロッパからの断絶を意味していた訳ではなかったからだ。』

『 ところがそのアメリカにおいて、少なくとも20世紀には、リベラリズムはもっぱら消費者の「生活水準」の問題となり、デモクラシーが「世論による政治」の様相を呈してくるのである。「消費者」と「世論」が社会の主役に持ち上げられる。こうしてアメリカは、「ヨーロッパ的なるもの」から断絶をしてゆく。そしてここに、固有の意味で「現代」が始まる。』

『 産業化を達成しようとする国家はむしろ戦後すすんでアメリカニズム、すなわちビジネスと一体になったリベラル・デモクラシーの観念を受け入れようとしてきたのである。之が20世紀のアメリカ文明の「普遍」ということの意味であった。しかし、いまそのアメリカが限界に達している。リベラル・デモクラシーはもはや強い説得力をもてなくなっている。おおくの人はこれをアメリカの経済力の衰退の結果だという。直接的な因果でいえばこのことにまちがいはなかろう。しかし、それが果たした文明史的な意味を問題にすれば、見方は少し違ってくる。』

『 現代のリベラル・デモクラシーは、その基礎にあるヴァーチャー（公共的価値）を見失って、もはや共和国を支えることができなくなっているのではないだろうか。』

『 ローマが無限に拡張するかに見えたように、現代ではリベラル・デモクラシーも無限に拡張するかに見える。しかし、まさにそのときローマの共和国は崩壊しつつあったのである。シヴィック・リベラリズムの考えからすると、共和国の崩壊は、自由と平等のあまりに無制限な拡張と、過度に商業主義から生ずる。そしてそれはまた現代社会を特徴づけるものなのだ。』

『 アメリカ連邦共和国を、たえず崩壊の危機をはらんだ「実験」だと考えていたアメリカの建国の父たちの危惧は、決して過去のものではない。自由と平等、それに国家（共和国）という柱の上に文明を築こうとする限り、決してローマの予言的教訓は過ぎ去ったものにはならないのである。』・・・と。

以上のことを十分認識した上で、私たち日本人は、日本の精神を外国人に語らねばならないと思う。私たちは、歴史的にずっと仏教や神道を信仰してきて、日本の精神を作ってきたのだ。では、日本の精神とは何か？　そこが問題の核心である。日本の精神をひと言で言えば、「脱主体化」、すなわち自己主張しないことである。それが何故立派なことであるのか、西欧人には理解されなくとも、今後は、私たち日本人はそれを十分理解した上で、西欧人に判ってもらおう努力をする必要がある。

この「日本の精神」に関する哲学としては、佐伯啓思のいうとおりにかっつての西田幾多郎の「無の思想」があるが、比較的最近のものとしては、私の尊敬する中村雄二郎の「リズム論」がある。佐伯啓思や呉善花は中村雄二郎の「リズム論」にはまったく触れていないので、私は、以下において中村雄二郎の「リズム論」について詳しく述べていきたい。ここでは、中村雄二郎の「リズム論」の世界性を述べることになる。また、佐伯啓思が「日本の精神」との関連で触れている「無」についても、その世界性を述べるとともに、中村雄二郎の「リズム論」と西田幾多郎の「無の思想」との繋がりを明らかにするつもりだ。

日本の精神と中村雄二郎の「リズム論」

はじめに

目次

序論

第1章 日本の精神

第1節 佐伯啓思の認識について

第2節 呉善花（オ・ソンファン）の認識

第2章 中村雄二郎の「リズム論」

第1節 場所性について

- 1.はじめに
2. 養老孟司の身体論
3. 身体内を駆け巡る粒子の不思議な現象
4. 地霊的な場所について
5. 身体的な場所について
6. おわりに

第2節 中村雄二郎のリズム論におけるリズムとは

- 1、はじめに
- 2、天空の音楽
- 3、「祈り」は「リズム」である
- 4、コミュニケーションは「リズム」である
- 5、「編集」は「リズム」である
- 6、「形」は「リズム」である

第3節 リズム論に基づく生活

1、リズム論に基づく生活とはどんな生活か？

- (1) 文部省唱歌を歌うこと。
- (2) 昔話を読むこと。
- (3) 歴史的な場所に出かけること。
- (4) 日本で使われた古い道具を愛でること。

2、「野生の思考」について

3、「哲学的宗教」について

4、「野生の思考」に関連して

第3章 無について

第1節 無の哲学について

第2節 空について

第3節 無と空は同じか？

第4節 私たちはどうすれば無の心境になれるか？

おわりに

序文

私たちは、歴史的にずっと仏教や神道を信仰してきて、日本の精神を作ってきた。では、日本の精神とは何か？　そこが問題の核心である。日本の精神をひと言で言えば、「脱主体化」、すなわち自己主張しないことである。それが何故立派なことであるのか、西欧人には理解されなくとも、今後は、私たち日本人はそれを十分理解した上で、西欧人に判ってもらおう努力をする必要がある。

この「日本の精神」に関する哲学としては、佐伯啓思のいうとおりにかつての西田幾多郎の「無の思想」があるが、比較的最近のものとしては、私の尊敬する中村雄二郎の「リズム論」がある。佐伯啓思や呉善花は中村雄二郎の「リズム論」にはまったく触れていないので、私は、以下において中村雄二郎の「リズム論」について詳しく述べていきたい。ここでは、中村雄二郎の「リズム論」の世界性を述べることになる。また、佐伯啓思が「日本の精神」との関連で触れている「無」についても、その世界性を述べるとともに、中村雄二郎の「リズム論」と西田幾多郎の「無の思想」との繋がりを明らかにするつもりだ。

第1章第1節「佐伯啓思の認識について」では次のように述べた。

佐伯啓思の認識のとおり日本はアメリカの従属国家であるとはいえ、そのお陰で、日本は今後世界の列強に侵略される心配は無くなっている。したがって、日本は強力な「主体」として世界史的役割を果たさなければならないという状況にはない。すなわち、脱主体化という「日本精神」をもって日本は「主体」として世界史に参入しなければならないという矛盾はなくなっていると考えて良い。日本は、アメリカの従属国家のまま、脱主体化という「日本の精神」を生きていけば良いのである。

第1章第2節「呉善花（オ・ソンファン）の認識」では次のように述べた。

今、日本は、バブル経済の崩壊以降、深刻な不況に悩まされ続けている。低迷し続ける株価、高まる失業率、一向に進まぬ構造改革……。それに追い打ちをかけるように、アメリカ発の、公平を前提とした世界標準の波に翻弄され、お家芸の「もの作り」でも、背後からひたひたとアジア諸国の追い上げの足音が聞こえてきている状況だ。

しかし呉善花は、その著「日本の精神の可能性」（2002年12月、PHP研究所）の中で、自身を喪失しかけた日本と日本人に、熱いエールを送る。その基になっているものこそ、日本人自身も気づかずにいる「非利己的な精神」であるという。それを具体的に言えば、オリジナルを上手く取り入れ、オリジナル以上の新たなモノや文化を創り出す力であり、主語を省いても意思疎通が出来る言語であり、「正しく生きる」ことより「美しく生きる」ことに価値を見出す精神などであるという。呉善花の著書「日本の精神の可能性」は、この「日本の精神」を検証しつつ、日本再生の道を提唱する、瀬戸際に立つ日本人へのエールの書である。

私も呉善花の認識とまったく同じような認識に立っている。呉善花のいう非利己的な精神は、佐伯啓思のいう脱主体化という「日本の精神」と同じである。

第2章の「中村雄二郎のリズム論」では、第1節「場所性」で、次のように述べた。

日本の場合、「歴史のおもむき」や「自然のおもむき」の指し示すところによって、人びとは共生を志向し、場の雰囲気としては仲間を大事にするようになる。すなわち、人びとの主体性がなくなる。日本の場合、「風土」というものの働きの結果、脱主体化が起こるのである。何故日本の場合にこういうことが起こり、西欧では何故こういうことが起こらないか？ それは、象徴的な場所の働きによるらしい。象徴的な場所の働きとは、歴史的に培われた人びとへの宗教感覚の刷り込み現象であるが、日本の場合、中沢新一のいうスピリットが関係している。

また、第2節「中村雄二郎のリズム論におけるリズムとは？」では、私たちすべての人間は、「胎児のときに宇宙の波動を受けている」という科学的事実を説明した上で、「祈り」はリズムである、コミュニケーションはリズムである、松岡正剛のいう「編集」はリズムである、「形」はリズムである、それらのことを詳しく説明した。

さらに、第3節「リズム論に基づく生活」では、中村雄二郎のリズム論からすると、私たちは、日常の生活においてどのような習慣を身につければいいか？ それをまずいろいろと考えてみた。祈りの問題、コミュニケーションの問題、音楽の問題、昔話の問題、歴史

的场所の問題、民具の問題などのリズム性について説明した。しかし、中村雄二郎の「リズム論」をより世界性を持った哲学に育てる必要から、「哲学的宗教」という概念を提案し、その説明をした。

哲学は理論である。宗教は実践である。実践にもとづく「直感」が大事である。超越者に対する「直感」が働くような実践がないといけないと思う。理論と実践・・・、それが「哲学的宗教」である。「哲学的宗教」は宗教的哲学者と哲学的宗教家の活躍があつてはじめて一般的な宗教となるのであろう。その理論と実践の仕方は違うであろうが、双方とも専門家であるが故にそれなりのレベルのものが身につけていなければならない。しかし、一般大衆は、事情がまったく異なる。一般大衆は、専門家ではないので、理論も実践もほどほどのものであつてやむを得ない。しかし、宗教であるから、理論ははともかく、実践は・・・、一般的なものであるにしても、それなりの「試練」というか「受苦」は必要であろう。そこがもっとも肝心な点である。もちろんその実践は非日常的であつてよい。私は、非日常的に「自然」の中で宇宙との「響き合い」を実感する・・・、そのことが大事であると考えている。すなわち、「対称性社会の知恵」は・・・、理屈によつてではなく、宇宙との「響き合い」という体験の積み重ねによつて身に付くものと考えているのだ。修験道もよし。山登りもよし。これらは今の人びとや自然とのコミュニケーションだが、この他、時空を超えた人びと及び文化とのコミュニケーションもきわめて大事なことだ。ともかく宇宙との「響き合い」をできるだけ数多く経験することだ。そのための場所づくりが望まれる。これから大事なことは、中村雄二郎のリズム論を発展させることである。そのためには、多くの人々が「野生の思考」に関係のある思想や哲学を書いていく必要がある。

中村雄二郎の「リズム論」に基づく生活を続けながら、修験道もよし、山登りもよし、私たちは「野生の思考」を身につけ、思うところをともかく書いていくことだ。第3節「リズム論に基づく生活」でいちばん言いたいことはこのことだ。

第3章『「無」について』では、「無」という言葉の使い方に混乱があるので、私は、西田幾多郎の絶対無に限定して無という言葉を使うこととして、「無」について多面的な説明をした。仏教哲理「空」との関係、老荘思想「道」との関係を明らかにし、中村哲学の

発展性を示唆した。その上で「おわりに」書いたが、無の哲学は西洋ではまったくの未熟であると言っている。それに対して日本では、西田幾多郎によって無の哲学が基礎づけられたし、今後、いくつかの課題を解決して、西洋に通用する無の哲学が完成する可能性は高い。無の哲学こそこれからの世界にあるべき哲学であると思う。

私たち日本人は、リズム論に基づく生活を続けながら日本の精神を生き、かつ、同時に、「哲学的宗教」である道教にエールを送りながら「日中友好親善」を深めて行かなければならないのではないか。ヨーロッパアメリカ文明は、キリスト教も含めて終焉を迎えている。これからあるべき「哲学的宗教」は多神教でなければ世界はやっていけないと思う。日本の宗教は多神教だが、残念ながら哲学の裏打ちがない。中村雄二郎のリズム論はその端（はし）りでしかない。したがって、世界の人びとに日本人の宗教観を理解してもらうことは難しい。「哲学的宗教」である道教は世界最強の宗教である。「哲学的宗教」である道教にエールを送りながら、私たちのやれることをやっに行こう。これから大事なことは、中村雄二郎のリズム論を発展させることである。そのためには、多くの人が「野生の思考」に関係のある思想や哲学を書いていく必要がある。

第1章 日本的精神

第1節 佐伯啓思の認識について

佐伯啓思の『増補版 「アメリカニズム」の終焉 シヴィック・リベラリズム精神の再発見へ』（1998年9月、TBSブリタニカ）は、その初版（1993年）に、新たに序論が付け加わっているが、その序論では次のように述べられている。すなわち、

『 今日、グローバリズムの名の下に、市場経済の世界的、普遍的な展開が唱えられるが、このグローバリズムこそまさにアメリカニズムの帰結に他ならない、というのが私の考えである。 「アメリカニズムの終焉」という本書の題名は、アメリカの覇権の後退といったようなことを意味している訳ではない。私はアメリカ型の文明（そしてそれは必ずしもアメリカ社会そのものと同じではない）がもたらす危険性について述べたかったのであり、アメリカ的なものに示される「超近代主義」が亀裂をあらわにし、もはやうまくは立ち行かなくなるだろう、と述べたかったのである。そしてその見解は、アメリカの経済的覇権が再び確保されたかに見える今日でも変わらない。それどころか、本書でいうアメリカニズムは、ますます世界的な規模で不安定性を高めていくのではないか、と思われるのである。』・・・と。

佐伯啓思のアメリカに対する認識は、アメリカは世界をリードする文明的な力を失っているというものである。そういう基本的な認識のもとで、今後、世界はますます不安定になっていくであろうと述べている。

ところで我が日本のことであるが、日本はアメリカの従属国家であるため、このままでは日本が世界平和のために寄与するなどということは夢のまた夢になってしまう。世界平和を国是とする我が日本としてはそれではいけないのであるが、日本はアメリカの従属国家であるため、そこにわが国が抱える最大のジレンマがある。それを書いたのが、佐伯啓思の「従属国家論・・・日米戦後史の欺瞞」（2015年6月、PHP研究所）である。佐伯啓思は、その中で次のように述べている。すなわち、

『 「アメリカ」を相対化して眺めるためには、「アメリカ」を超えた視点が必要となる。それは、日本独自のやり方で「世界」を見る、ということです。「世界」を見る独自の視点がなければならない。』

『 しかし、そんなものは持ち合わせていない。もちろん、イスラムの専門家もいるし、ロシアの専門家もアジアの専門家もいます。しかし、一つは、これらの専門家の多くはアメリカのイスラム研究やアジア研究の影響が強く、彼らも「世界」と見る場合には、どう

してもアメリカの見方を参照せざるを得ません。また、国際関係論や経済学はほぼアメリカ一辺倒なのです。こうして、日本独自の観点から「世界」を理解する、ということができない。むしろ、「世界」を見る見方を「アメリカ」から借りてくる。こうなると、とても「アメリカ」を見る、外部的（超越的）観点を持ち合わせているとはいえません。ここに大きな問題があるということをまずは了解して下さい。』・・・と。

佐伯啓思のアメリカと日本に対する基本的認識は以上のとおりであるが、彼のいうとおり、確かに現在のところは、日本においても「アメリカ」を超えた視点なんてものは育っていないのかもしれない。しかし、アメリカの精神とは対極的な日本の精神がない訳ではないと私は考えており、今後、その哲学と思想を日本で確立していく可能性がない訳ではない。

日本の精神の哲学について、佐伯啓思は「従属国家論・・・日米戦後史の欺瞞」（2015年6月、PHP研究所）の中で次のように述べている。すなわち、

『西田哲学のもとに参集した京都学派の学者にとって「日本の精神」の核心は、西田幾多郎の「無の思想」だった。（中略）「無の思想」においては、**日本精神の最大の意義は、「主体」を立ち上げない点にある。脱主体化です。**「主体化」は「有の思想」として西洋思想の基軸であり、だからこそ、西洋自由主義の中で「主体」の抗争が帝国主義へゆきついたのでした。したがって、すべてを包括し、多様なものを多様なままに「一」とする脱主体化された日本思想こそが帝国主義を克服できる、と彼らはいったのです。ところが、そのために、日本は強力な「主体」として世界史的役割を果たさなければならなかった。脱主体化という「日本精神」をもって、日本は「主体」として世界史に参入しなければならない。これはどうにもならない矛盾であり、この思想戦における京都学派の敗北は予定されていたとさえいってよいでしょう。』・・・と。

さて、ここがいちばん大事な点だが、佐伯啓思の認識のとおり日本はアメリカの従属国家であるとはいえ、そのお陰で、日本は今後世界の列強に侵略される心配は無くなっている。したがって、日本は強力な「主体」として世界史的役割を果たさなければならないという状況にはない。すなわち、脱主体化という「日本精神」をもって日本は「主体」として世界史に参入しなければならないという矛盾はなくなっていると考えて良い。**日本は、アメリカの従属国家のまま、脱主体化という「日本の精神」を生きていけば良いのである。**

第2節 呉善花（オ・ソンファン）の認識

呉善花は、その著「日本的精神の可能性」（2002年12月、PHP研究所）の中で次のよう述べている。すなわち、

『 世界がけっしてアメリカ一極化の方向に向かっているわけではない。』

『 古くからの理想モデルとして、それぞれ文化や制度の異なった諸国が、それぞれの長所を生かし合い、短所を補い合い、お互いに協調し合うことによって結びつこうとする国際関係を生み出す方向へ世界を開いていかななくてはならないという、国際協調関係を軸にした世界論がある。この国際協調モデルは理想すぎて困難なもののように見える。しかし、私は逆にもっとも現実的なものではないかと考える。』

『 世界の情報化、消費社会化が進む中で、多くの人々の間に共通の文化価値や社会価値が生み出されている。それと同時に、自然条件も習慣も異なる国や地域の人々が、お互いに固有の文化価値や民族的アイデンティティを理解し合いながら協力し合っていこうとする関係が生み出されている。諸国はますます抜き差しならない相互依存関係に入っていく、人々是对立から協調への道を自覚し、模索せざるを得なくなっていく。そこから、国際協調を現実的なイメージとして描ける時代がやってくるのではないか、というのが私の考えである。』

『 日本が、非利己的な精神を失うことなく何とかここまでやってきたところで、自我的な個人行動の精神に依拠した西欧近代の行き詰まりがはっきりしてきた、というのが今の世界の現実ではないでしょうか。ここで日本がそうした西欧近代の依拠した精神の方向を目指せば、西欧近代の限界とそのまま運命をともにするしかありません。私は、日本はそのギリギリのところに立ち至っているのではないかという思いから、日本の非利己的な精神の未来的な可能性をできるだけ探ってみようと、本書の執筆に向かいました。』・・・と。

今、日本は、バブル経済の崩壊以降、深刻な不況に悩まされ続けている。低迷し続ける株価、高まる失業率、一向に進まぬ構造改革……。それに追い打ちをかけるように、アメリカ発の、公平を前提とした世界標準の波に翻弄され、お家芸の「もの作り」でも、背後からひたひたとアジア諸国の追い上げの足音が聞こえてきている状況だ。

しかし本書のなかで著者は、自身を喪失しかけた日本と日本人に、熱いエールを送る。その基になっているものこそ、日本人自身も気づかずにいる「**非利己的な精神**」であるという。それを具体的に言えば、オリジナルを上手く取り入れ、オリジナル以上の新たなモノや文化を創り出す力であり、主語を省いても意思疎通が出来る言語であり、「正しく生きる」ことより「美しく生きる」ことに価値を見出す精神などであるという。本書は、この「**日本の精神**」を検証しつつ、日本再生の道を提唱する、瀬戸際に立つ日本人へのエールの書である。

私も呉善花の認識とまったく同じような認識に立っている。**呉善花のいう非利己的な精神は、佐伯啓思のいう脱主体化という「日本の精神」と同じである。**

この「**日本の精神**」に関する哲学としては、佐伯啓思のいうとおりに西田幾多郎の「**無の思想**」があるが、比較的最近のものとしては、私の尊敬する中村雄二郎の「**リズム論**」がある。佐伯啓思や呉善花は中村雄二郎の「**リズム論**」にはまったく触れていないので、私は、以下において中村雄二郎の「**リズム論**」について詳しく述べていきたい。ここでは、中村雄二郎の「**リズム論**」の世界性を述べることになる。また、佐伯啓思が「**日本の精神**」との関連で触れている「**無**」についても、その世界性を述べるとともに、中村雄二郎の「**リズム論**」と西田幾多郎の「**無の思想**」との繋がりを明らかにするつもりだ。

第2章 中村雄二郎の「リズム論」

第1節 場所性について

中村雄二郎のリズム論に関連していろいろ話しをする時、彼は<身体的なものとしての場所>と呼んでいるが、その「身体的な場所」の特性を「場所性」と呼ぶことにする。

1.はじめに

中村雄二郎は、場所というものの特性を4つに分類し、「身体的な場所」の特性、つまり「場所性」に注目し、彼の哲学、リズム論を展開している。「身体的な場所」の他に、生存のための場所（彼のいう<存在根拠(基体)としての場所>）、象徴的な場所（彼のいう<象徴的な空間としての場所>）、トポス的な場所（彼のいう<論点や議論の隠された所としての場所>）があるが、中村雄二郎によれば、「身体的な場所」というのがいちばん大事であるようなので、以下においてその点の説明をしたい。ただし、その説明を一般の人に判りやすくすることは大変難しいことであるので、私なりに、できるだけ単純化した説明を試みるが、私の勉強不足のため、間違った説明になるかもしれない。その点はあらかじめ御断りしておきたい。

2. 養老孟司の身体論

今、養老孟司（ようろうたけし）の「バカの壁」（2003年4月、新潮社）という本がベストセラーになっている。彼は、かつて永く東大の解剖学の教授をしていて、まあいかなれば脳の専門家である。「唯脳論」などという本も書いているのだが、彼のいうことには吃驚することが多く、目からウロコが落ちるようなことが多い。今回の本もそうだ。例えば、『現状は、NHKの「公平、客観、中立」に代表されるように、あちこちで一神教が進んでいる。それが正しいかのような風潮が中心になっている状況は非常に心配です。安易に「わかる」、「話せばわかる」、「絶対の真理がある」などと思ってしまう姿勢、そこから一元論に落ちていくのは、すぐです。一元論にはまれば、強固な壁の中に住

むことになります。それは一見、楽なことです。しかし向こう側のこと、自分と違う立場のことは見えなくなる。当然、話は通じなくなるのです。』・・・などと言われると、もう吃驚してしまう。しかし、養老孟司の言うことは真実であると思う。科学的であると思う。

さて、私は先に論考「[神話と現実](#)」において、『 神話を語るには「場所の持つリズム性」が重要である。宮沢賢治の童話や草野心平の詩を語るには「場所の持つリズム性」が重要である。私たちは、そういう「場所の持つリズム性」に着目すべきであって、子供や若者はそういう「場所」の発するリズムに耳を傾けなければならないのである。「場所」の発するリズム、それは風土の発するリズムということかもしれないが、そういうリズムに耳を傾けることによって具体性の世界と深く結び付いた感性というものが養われるのである。』・・・と述べた。

日本人と自然とは一体不可分の関係にある。日本人は、山や川に恵まれ、しかも四季折々の風景の中で自然と一体になって生きてきた。そういう日本独特の場所性を生きてきたと言える。場所性を生きるということは、場所のリズムに身を任せるということであって、俺が俺がと自己主張をしないのである。無為自然の姿がそこにある。だから日本人は、無意識のうちに老子の言う自然、道、宇宙の真理が身に付いているのではないか。自己主張をしない日本人。これが日本人の特性だ。日本精神とは述語的生き方であり、日本の歴史伝統文化の心髄は、違いを認める文化である。

それが、中村雄二郎のリズム論であると思う。その核心部分は場所の持つリズム性にある。そして、その場所の持つリズム性というものは、プラトンの「コーラ」とも繋がっており、その意味で、中村雄二郎のリズム論はひとつの哲学であると言える。そのリズム論から主体性の乏しい日本人ということが言えるのか？ それが今回の論文の主テーマであるが、追々その説明をして行きたいと思う。

では、養老孟司の身体論を紹介しておきたい。

養老孟司は、その著「バカの壁」の中で「身体」について極めて重要なことをいっている。人間は「身体」を通じていろんなことを学習していく。学習というと「脳」の問題だと思われがちであるが、そうではなくて、「身体」を通じて学習する部分というのが非常に大きい、というのが養老孟司の認識の基本である。これは、西田幾多郎の「場所の論理」や中村雄二郎の「リズム論」と同じ認識である。「戦後、我々が考えなくなったことのひとつが<身体>の問題です。」と養老孟司は鋭く指摘しているが、確かに戦後の日本に

は身体をあまり動かさない頭でっかちの・・・まあいうなれば不健全な人間が増えてしまったようだ。不健全な人間が多くなれば国家自体も健全であるはずがない。国家が健全でなければいよいよ不健全な人間が増えていくという・・・悪循環に陥ってしまう。それを正すには、やはり原点の問題、つまり「身体」の問題に戻ることだ。養老孟司は次のように言っている。

『江戸時代には、朱子学のあと、陽明学が主流となった。陽明学というのは何かといえ、ば、「知行合一（ちこうごういつ）。すなわち、知ることと行なうことが一致すべきだ、という考えです。しかし、これは「知ったことが出力されないという意味がない」という意味だと思えます。これが「文武両道」の本当の意味ではないか。文と武という別のものが並列していて、両方に習熟すべし、ということではない。両方がぐるぐる回らなくては意味がない、学んだことと行動とが互いに影響しあわなくてはいけない、ということだと思えます。

赤ん坊でいえば、ハイハイを始めるところから学習のプログラムが動き始める。ハイハイをして動くとき視覚入力が変わってくる。それによって自分の反応＝出力も変わる。ハイハイで机の脚にぶつかりそうになり、避けることを憶える。または動くとき視界が広がるのがわかる。これをくり返していくことが学習です。

この入出力の経験を積んでいくことが言葉を憶えるところに繋がってくる。そして次第にその入出力を脳の中でのみ回すことができるようになる。脳の中でのみの抽象的思考の代表が数学や哲学です。

赤ん坊は、自然とこうした身体を使った学習をしていく。学生も様々な新しい経験を積んでいく。しかし、ある程度大人になると、入力はもちろんですが、出力も限定されてしまう。これは非常に不健康な状態だと思えます。

仕事が専門化していくということは、入出力が限定化されていくということ。限定化するということはコンピュータならば一つのプログラムだけをくり返しているようなものです。健康な状態というのは、プログラムの編成替えをして常に様々な入出力をしていることなのかもしれません。

私自身、東京大学に勤務している間とその後では、辞める前が前世だったんじゃないか、というくらいに見える世界が変わった。結構、大学に批判的な意見を在職中から自由に言っていたつもりでしたが、それでも辞めてみると、いかに自分が制限されていたかがよくわかった。この制限は外れてみないとわからない。それこそが無意識というものです。

「旅の恥はかきすて」とは、日常の共同体から外れてみたら、いかに普段の制限がうるさいものだったかわかった、ということを示している。身体を動かすことはそのまま新しい世界を知ることにつながるわけです。』・・・と。

そうなのだ。身体を動かすことはそのまま新しい世界を知ることだ。私たちは、新しい世界を知るためには、とにかく身体を動かすことを考えねばならない。本を読んだりテレビを見ることも必要だけれど、私たちはもっと身体を動かすことを考えなければならない。そう考えれば、私たちの学習プログラムは無限にある。私たちは、養老孟司が言うように、「身体と脳の学習プログラム」をいろいろとつくり出さなければならない。私たちは、「場所のもつリズム性」に着目して、さまざまな舞台装置をつくっていかなければならない。私たちは、「場所のもつリズム性」に着目して、さまざまな仕掛けをしていかなければならないのだ。新しい地域づくりだ。新しい川づくりだ。新しい森づくりだ。新しい村づくりだ。いろんな人たちの出会いの場づくりだ。

3. 身体内を駆け巡る粒子の不思議な現象

清水博の「生命を捉えなおす」（中公新書）は、初版が1978年である。その後大いに研究も進み、その増補版が出たのが1990年5月である。特に注目すべきは「関係子」という考え方であろう。中村雄二郎はメディオンと呼んだらどうかとアドバイスしたようであるが、中村雄二郎のリズム論とも関係が深く、**関係子が発生するリズムの「相互引き込み現象」**は清水博の画期的な発見であるといえるようだ。関係子に関する研究がこれからどんどん進み、生命の神秘がもっともっと明らかにされるであろう。清水博の名付けた関係子というものの着想は実にすばらしい。しかし、最近出版された「場の思想」（2003年7月7日、東京大学出版会）には、あまりにも専門的すぎるということであろうか、関係子の話が出てこない。誠に残念である。

清水博のイメージする関係子という概念と、中村雄二郎のイメージするメディオンという概念とは厳密に言えば必ずしも同じものではないのかもしれないが、私は、哲学としては、やはりメディオンの方がなじみがいいと考えている。**哲学としては、意識野を駆け巡る粒子又は波動（リズム）というイメージではなかろうか。唯識においては、意識と無意識の間を循環する粒子又は波動（リズム）というイメージではなかろうか。**私は、今ま

で、そういうイメージで粒子又は波動（リズム）という言葉を使ってきたが、私は今後、そういう粒子又は波動（リズム）をメディオンと言い換えることとしたい。私は、中沢新一の「神の発明」（2003年6月、講談社）におけるスプリットに注目しており、「この世」にスプリットが出現する場合私たちの意識野にどのようなメディオンたちが出現しているのか、そんな問題が問題になってくるように思われる。スプリットたちとメディオンたち、なかなか面白いテーマではないか。メディオンについてはおいおい語っていくとして、ここでは、清水博の名付けた「関係子」について、その要点を説明しておきたい。

私は今まで、生命学という言葉を使ってきたが、清水博は、生命学とは言わないで、「生命関係学」と呼んでいる。その理由は、関係性というものの重要性を十分認識した上でのことである。生命システムは多様な複雑性とそこに自己組織される秩序があるというのが清水博の基本的な考え方であるが、その場合、清水博の考えからすると、その秩序というものは一義的なものではなく誠に多義性に富んだものである。そういう秩序の多義性というものはどこからくるのかというのがもっとも基本的な問題で、清水博は、生命の働きを生成的、关系的に捉えない限り、その問題は解けないと考えている。関係性というものの重視である。その粒子がたくさん集まったときにその状態によってグループとしてのいろんな機能が出てくるのだそうだ。もちろん粒子ごとに特定の機能というものはあるのだが、グループとしての機能はそれら個々の機能の合計ではなくて、全然別の新たな機能は追加的に出現してくる。それは何故か。多くの粒子がどういう状態になっているか、そそれら粒子の間に関係性によって、いろんな機能が出てくるのだそうだ。そういうことで、関係性というものが大事である。そういう関係性というものに着目して研究を進める必要がある・・・というのが清水博の考えである。

さて、清水博は、「生命を捉えなおす」（1990年増補版、中公新書）で次のように言っている。

『生命システムは絶えず不確定な変化をする環境のなかで生きていかなければなりません。そのためには生命システムが環境のなかで何らかの積極的な活動をする必要があります。どのような活動がふさわしいかは、そのときのシステムの状態と環境の状態とによって変わります。一般に環境は複雑で、その変化は規定できません。そのためにすべての操作情報（この場合はフィードフォワード制御に用いる情報）をあらかじめ用意して

おくことはできません。そして状況に応じて適切な操作情報を自己組織する必要があります。』

やはりむつかしいですね。むつかしい。先述のように、直感的な理解のために、即興劇モデルをつかって解説しよう。劇場で役者が即興劇を演じている。観客がそれを見ている。照明装置や音響装置などの劇場としてのシステムが当然ある。まあ、言うなれば、即興劇を演じる役者は、劇場主やシナリオ作家や演出家などからあらかじめ必要な情報を与えられているが、劇が始まってしまうと、あとはもう、観客と舞台と一体になって自分の思うように臨機応変に演技を演じる。それが即興劇だが、清水博は、「生命を捉えなおす」（1990年増補版、中公新書）で次のように言っている。

『 役者の演技は、大まかな筋という拘束条件のもとで、大ざっぱに決められますが、具体的には役者同士の演技の相互関係によって、選択されたり、つくられたりしながら劇を進行させていくのです。その演技は、全体として一つの筋を生成的に自己組織しながら展開していく必要があります、場違いな演技をすることはできません。 』

上記の記述の中には、環境とシステムは記述されているが活動主体が記述されていない。しかし、文中、操作情報という言葉が使われているがそういう情報を自己組織する活動主体というものが念頭にあり、清水博はそれを関係子と呼んでいる。すなわち、関係子とは、システムや環境から発せられるさまざまな情報を受け取って、臨機応変に、あらたに自らの活動に役に立つ・・・いわゆる操作情報というものを自己生産している。自己組織という言葉を使っているが自己生産という意味で理解してもいい。より正確にいうと、自己組織するとは、自己生産しながら自分の組織に組織化してしまうという感じである。言葉というものは感じが大事なので自己組織という言葉にそういう感じを感じて欲しい。要するに、関係子というのは、意味のある操作情報を自己組織するのである。

即興劇モデルでいえば、環境は観客、システムは劇場の照明装置や音響装置などの劇場システム、関係子は役者ということになるが、場の情報、すなわち劇場全体の情報は、それぞれ環境からの情報、システムからの情報、関係子で自己組織される情報のトータルである。

そういう場の情報については、清水博は次のように述べている。

『 一般に場の情報は、環境、システム、関係子という順に上から下へと流れて、環境やシステムの状態を要素である関係子に伝え、そして関係子群の 情報生成によって、関係子の状態が下から上へと逆行する状態で運ばれ、全体として情報の循環ループが形成されます。このように循環する情報は、関係子をシステムのなかで位置づけるばかりでなく、また環境のなかでも位置づける働きをします。

これまでのシステム論では、環境はシステムに対する固定された境界条件であると仮定され、その中でシステムと要素のとの関係、そして要素と要素との関係だけを論じてきましたが、環境とシステム、そして環境と要素との関係を、意味的な面を含めて議論するために本当に必要な方法をもっていませんでした。今後は環境の複雑さを前提として、環境、システム、要素の三者の関係を取り扱うことのできる科学をつくることも含めて、環境から関係子である人間に送られてくる場の情報を読み取ることが、ますます重要になってくるでしょう。 』

身体内を駆け巡る粒子「メディオン」の不思議な現象についてご理解いただいたでしょうか。メディオンの「引き込み現象」ということですね。「目と目で話す」とか「一目惚れ」というのがありますが、これらはメディオンの「引き込み現象」によるものです。また、[今西錦司の「プロトアイデンティティー」](#)というのがありますが、これは無意識に認識する「仲間意識」だと考えていいかと思いますが、これも メディオンの「引き込み現象」のひとつではないかと思われまます。

4. 地霊的な場所について

地霊については、論文「[霊魂の哲学と科学](#)」の[第6章「\[霊魂の科学\]\(#\)」](#)から抜粋した[私の説明](#)があるが、さらにその要点を書き写せば以下のとおりである。

ゲニウス・ロキ（地霊）とは、現代建築において「ある場所の特有の雰囲気」を指す言葉である。中村雄二郎は「[ゲニウス・ロキは、それぞれの土地がもっている固有の雰囲気であり、歴史を背景にそれぞれの場所がもっている様相である](#)」と説明している。

日本でゲニウス・ロキ概念について最も詳細に語っているのは、鈴木博之である。鈴木博之は、当初ゲニウス・ロキを「土地の精霊」と訳してきたが、後に「地霊」という訳語を当てるようになった。これについて、「わが国でも土地と精神性との関係を意識する伝統は古来あって、「英雄の出づるところ地勢よし」とか「人傑地霊」という言葉も存在する」ことから「地霊」という言葉を採用したと述べている。

鈴木博之の地霊に関する著書には、その代表的なものとして『建築の七つの力』（鹿島出版会、1984）がある。

「地霊の力」の項（初出は『アプローチ』1979年夏号所収の「見えないものの力」）で、タウンスケープに絡めて地霊（ゲニウス・ロキ）について述べられている。

「ゲニウス・ロキとは、結局のところある土地から引き出される靈感とか、土地に結びついた連想性、あるいは土地がもつ可能性といった概念になる。」

「地霊の力（ゲニウス・ロキ）という言葉のなかに含まれるのは、単なる土地の物理的な形状から由来する可能性だけではなく、その土地のもつ文化的・歴史的・社会的な背景を読み解く要素もまた含まれているということである。こうした全体性に目を開くこと、すなわちタウンスケープを、その土地固有の微地形や歴史性との対応のなかで読み解くことこそが、地霊の力（ゲニウス・ロキ）に対する感受性を生み出すのである。」

「建築的営為とは、地霊の力（ゲニウス・ロキ）を一方に据えてなされてきたものではなかったのか。そしてその集積が都市を作り上げてきたのではなかったか。」

「現代の東京の近代的なタウンスケープを訪れる際にも、われわれはその土地が歴史的必然をもってそのような現状に至っていることを忘れてはなるまい。そうした目をもつとき、はじめて新旧の街並みを統一的に見ることが可能となろう。」

タウンスケープにおいて、その土地の歴史的経緯が重視されており、この視点は続く著書において具体的に展開されることとなる。

論文「靈魂の哲学と科学」の第6章「靈魂の科学」からの抜粋部分は以上であるが、実は、「地霊」はプラトンの「コーラ」と同じようなものと考えていい。プラトンの「コーラ」については、私のホームページでいろいろ書いてきているが、その代表的なものを次に紹介しておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/cola01.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/keikan04.html>

地霊的な場所について、とりあえずの説明は以上であるが、「地霊」にしても「コーラ」にしても直感的に判りにくいので、もっと判りやすい説明をせねばなるまい。「地霊」や「コーラ」を私たち日本人にわかりやすい言葉でいえば、「風土」のことである。先に、「日本人と自然とは一体不可分の関係にある。日本人は、山や川に恵まれ、しかも四季折々の風景の中で自然と一体になって生きてきた。」と述べたが、これは「風土」の自然的側面を言ったもので、「風土」には歴史的な側面があるのであり、その二つの側面も

持ったものが「地霊」であり「コーラ」である。これも先に述べたが、「風土」を「コーラ」と重ね合わせて理解することの重要性は、中村哲学をプラトン哲学に繋げるところにある。中村雄二郎のリズム論の核心部分は場所の持つリズム性にある。そして、その場所の持つリズム性というものは、プラトンの「コーラ」とも繋がっており、その意味で、中村雄二郎のリズム論は世界に通用し得る哲学であると言えるのである。したがって、プラトンの「コーラ」を語らずして地霊的な場所を語ることはできない。それ故、ここで「コーラ」についてその代表的なホームページを紹介したのだが、それを直感的に理解することはできない。そこで、これから「風土」についてオギュスタンベルクの研究を紹介して、「風土」の説明に代えたい。

オギュスタンベルクと哲学：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/keikan03.html>

歴史的なおもむき：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/keikan06.html>

自然的なおもむき：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/keikan06.html>

5. 身体的な場所について

身体的な場所とは何か？ 中村雄二郎の説明によると、これは、共同体、無意識、固有環境といった通常いうところの場所、厳密に言えば、＜存在根拠(基体)としての場所＞ということになるのだが、そういう通常いうところの場所とかかわり、一部重なり合っているのだと中村は説明している。というのは、中村によれば、意識的な自我主体は、実際には身体という場所を基体とすることなしにはありえず、しかもそこに成立する身体的実存によって、空間的な場所は逆に意味づけられ、分節化されるからである。そして、中村雄二郎は言う。そういう身体的実存によって意味づけられた空間、身体的実存によって分節化された空間というものは、身体の拡張としてとらえられる。すなわち、＜身体的なものとしての場所＞とあってよいのだと。

やっぱり哲学者の説明は難しいですね。私たちには、身体的実存とか分節化という言葉まじく使わないし、したがってすぐにはイメージが湧きませんね。

先に述べたように、固有環境というのは、個体の生存と活動を成り立たせている生物学的、生態学的な基盤のことである。通常私たちがいうところの環境は、もちろんここで

いう固有環境であるし、私たちの身体もそういう意味で固有環境である。生物学的な基盤ですからね。空間的な場所というものは、もちろん生物学的な基盤であるし、生態的な基盤である。したがって、間違いなく固有環境というか通常いうところの環境ではある。しかし、空間的な場所というのは、それにとどまらず、抽象的な意味をも持っている。私たちの身体が拡張したものとしての意味を持っているというのですね。それは何故かというのと、そういう抽象的な空間は、実際の生物学的・生態的な空間ではあるけれど、身体的実存によって分節化しているからなんですね。いよいよわからなくなりましたでしょうか。

大きな樹木をイメージしてください。大きな枝が出ていますね。何でこんな枝が出てきたのか。最初は小さな芽が出てくるのですが、そこに節があって、その節から枝が成長していく。太い幹から枝が分節化していくんですね。分節化というのはそういうイメージです。哲学者の使う言葉というものは厳密だ。枝分かれといったのでは節がイメージされない。節がこの際大事な意味を持っているので、節がきっちりイメージされなければならない。生物学的・生態学的な実際の空間など<存在根拠(基体)としての場所>というものの・・・、それは大きな幹だが、その幹には、身体的実存(身体性)という節があって、その節から抽象的な意味をもった空間(枝)ができる。そういうイメージです。だとすれば、問題は節ですね。身体的実存(身体性)という節ですね。これは一体何なのか。

先に述べたように、共同体や無意識は、固有環境とちがって、ふつうの意味での空間的な場所を形づくるものではない。が、それらは、意識的自我がそこにおいて成り立つ場あるいは場所を形づくっている。つまり、共同体、無意識、固有環境のいずれにもいえることは、それらが人間的自己にとって、基体としての場所、場所(基体)だということである。そういう<存在根拠(基体)としての場所>に身体的実存(身体性)という節がある。

ところで、身体は、人間的自己にとって、基体としての場所、場所(基体)であるとともに、目で見、耳で聞き、手で触れ、頭や心で意識をする主体でもある。身体は、客観的身体と主観的身体の両義性を持っている。しかも、意識の世界のみならず無意識の世界を持っている。私は先に、純粹経験の多様性を説明したなかで、「自己というものと自分の世界とは一対一に対応している」とか、<主客を没した知情意合一の意識状態が真実在である>であると述べた。また、拳体性起(きょたいしょうき)ということに触れながら真実在のイメージを説明した。真実在が花しているとか岩井しているというイメージである。身体的実存とか身体性というイメージが湧いてきたでしょうか。要するに、身体に

は物質性と精神性という両義性がある、それが節になって、身体の拡張としての空間ができていくのである。

<身体的なものとしての場所>という意味がお判りいただいたとして、さらに中村雄二郎の説明を聞こう。

『しかし、<身体的なもの>として捉えなおすとき、場所はどのようなものとしてあらわれるだろうか。この場合、精神と身体とが実態的に区別され、前者が後者のうちに宿ったり住まったりするのではない。そうではなくて、端的に言えば、むしろ活動する身体の自己意識が精神だということになる。私達は身体を持つのではなく、身体そのものを生きている。生きており活動している以上、意識は世界に向かって働いているが、そういう意識に対して、私たちの身体は基盤となり、したがって地平を形づくっているのである。

その上、活動する身体として、私たち一人ひとは、世界に向かって開かれ、私たちの身体は、皮膚によって閉ざされた生理学的身体でなく、その境界を越えた範囲にまで広がっている。拡張された身体をわかりやすいかたちで示すものは、社会空間のなかで形づくられる固有の場としてのテリトリー(縄張り)である。このテリトリーというのはもともとは動物行動学でいう棲み分けの範囲であり、個体あるいは種が支配的に振舞う範囲のことであるが、人間の場合にはそれが心的意味をつよく帯びるとともに、特定の場所に固定されないで可変性を持っている。』

「身体的な場所」については以上である。

6. おわりに

日本人は、中村雄二郎に言わせれば、「述語の世界」に生きているということだが、よく言われるように、日本人はあまり自己主張をしない民族である。これは何故か???

岸本英夫によれば、それはどうも「自然環境に対する親近性」からくるらしい。彼は、『日本の住民は、自然と協力していればよかった。自然に身をまかせていれば、生きることができた。したがって、自然に対して、おのずから親しさを感じた。自然の恩恵に対

して、感謝の態度を持つようになった。このようにして、自然に対する親近感が、基本的なパーソナリティ特性となったと考えられよう。』・・・と述べているが、 そうなのだ。日本人の自然観は、「人は自然の一部である」というものであり、自然と対立するものではない。自然はさまざまな姿を持つが、その森羅万象のすべてが親近感をもって心の奥に感じられる感覚、それが中沢新一のいうスピリットだと思うが、そういう日本人の感受性、それは日本人の自然観から来ている。　そういう感受性からは俺が俺がという自己主張は出てこない。　対立よりも協調。いろんなものと「共振（シンクロナイズ）」することが大事なのであって、　そもそも日本語は主語がはっきりしな場合が多いのである。要は、日本人の感受性も問題である。

以上の岸本英夫の考えの他、私は、「風土」の作用というものを考えてみたい。「風土」にメデイオンが作用すればどうなるかという問題である。オギュスタンベルクは、「歴史のおもむき」とか「自然のおもむき」と言っているが、日本の場合、「歴史のおもむき」や「自然のおもむき」の指し示すところによって、人びとは共生を志向し、場の雰囲気としては仲間を大事にするようになる。すなわち、人びとの主体性がなくなる。日本の場合、「風土」というものの働きの結果、脱主体化が起こるのである。何故日本の場合にこういうことが起こり、西欧では何故こういうことが起こらないか？　それは、象徴的な場所の働きによるらしい。象徴的な場所の働きとは、歴史的に培われた人びとへの宗教感覚の刷り込み現象であるが、日本の場合、中沢新一のいうスピリットが関係している。

第2節 中村雄二郎のリズム論におけるリズムとは？

1、はじめに

まずはじめに、「中村雄二郎のリズム論におけるリズム」の定義をしておきたい。

河合隼雄の「アイデンティティー」という概念がある。脳の中にはその人の経験により無数の「アイデンティティー」が形成されていて、それらが固有の振動特性をもって**ピクピク振動している**というのだ。その固有振動を持ったアイデンティティーは、ある特定の刺激と当然共振する。つまりある特定の外界(環境世界)と共振する。ということは、経験というものを媒介として、ある特定のアイデンティティに対応した環境世界がある。

そういう自己の中(脳の中)にあるアイデンティティーと共振を起こす波動を、私は「中村雄二郎のリズム論におけるリズム」と定義しておきたい。

以下において、私は「リズム」という言葉を使うが、それは一般的にいう単なる音楽的なリズムではなくて、哲学的なリズム、すなわち「中村雄二郎のリズム論におけるリズム」のことである。そのリズムの働きは、誠に奥深く宇宙的でなかなか理解困難であるが、まず最初に奥深く宇宙的であることの説明として、西田幾多郎の純粹経験についてお話ししておきたい。

人は、生れたばかりは誰でも無垢である。生来の感覚や知覚のみが働いている。生来の感覚や知覚が働いているが、まだ経験はないし理解力はないので、生れたばかりの人間は自己を理解することもできないし、外界つまり環境世界を理解することもない。逆に、人は経験を積み重ねることによって、固有振動を持ったアイデンティティーが増えながら自己というものが発達していき、自己を理解することも環境世界を理解することもできるようになるけれど、もはや本来の自己を理解することも本来の世界も理解することはできない。その生来の感覚や知覚のみを働かそうとすれば、経験によって獲得された固有振動を持つアイデンティティーを振動させない・・・、つまり雑念を取り除いた・・・、例えば座禅をすとか滝に打たれるとかの・・・特別の行為をしなければならない。そういう雑念を取り除いた特別の行為が・・・西田幾多郎の言うところの純粹経験である。純粹経験によってはじめて本来の自己や本来の世界というものを理解することができる。

純粹経験の諸様相については、次をご覧ください。

2、天空の音楽

量子物理学でいうところの「場」とは、空間において、ある性質を持った特定の物質が存在する場合に、その物質に作用し、何らかの力が発生させるという・・・空間的な性質である。

磁場は私たちが日常経験するのでイメージしやすいだろう。そこに磁石をおけば磁力という力が発生して磁石に作用する。重力場や電場も、磁場と同じようなものであって、重力場では重力という力、電場では電氣的な力が発生する。

さて、重力について基礎的な勉強をしておこう。

太陽のような星や銀河の構造や進化を決めている最も重要な力は重力である。宇宙に重力場という「場」があるので、そこに質量を持った物質があると、その質量に応じて引力という重力が働くのである。月の引力というものは、宇宙空間に重力場があるから発生している。海における潮の満ち引きは月の引力の変化に応じて起っている。潮の満ち引きというものは私たちに身近な現象であるが、もっと身近でもっと重要な話をしよう。

それは「月のもの（月経）」という女性の生理の話である。「月のもの（月経）」という女性の生理は月の運行と密接に関係している。これは疑う余地のない科学的事実として皆さんにも認めてもらえると思う。ということは、宇宙の「場」というものが女性の身体に作用している・・・ということなのだが、このことは認めていただけであろうか。まずこのことをしっかり認識しておいてもらいたい。

ドイツの有名はギタリストで指揮者でもあり作曲家でもあるベーレントという人がいた。1990年9月に亡くなったので、はや20年が経った。ベーレントは昭和天皇の前で演奏をしたこともある非常に立派な音楽家である。そのベーレントが「天空の音楽」ということを言い、「世界は音」という名著を書いた（日本版1986年1月、大島かおり訳、人文書院）。そのベーレントが、「天空の音楽」として、太陽系惑星から地球に降り注ぐさまざまなリズム（波動）を音に変換して、そのカセットを上記「世界の音」（日本版）の出版に併せて別途販売することにした。「リズム論」で独特の哲学を編み出した

中村雄二郎は、上記のベーレントが出している惑星の奏でる音楽を聞いた後で、室岡一（日本医大教授、故人）氏が録音された胎児の聞く母親の胎内音を聞き、その両者が非常によく似ている・・・と言うことを発見されたのである。

私の広島時代の経験だが、中国山地を中心に、瀬戸内海側、日本海側、もう過疎地域ばかり。だいたい昭和33年ぐらいをピークにして、ものすごい過疎が進行した。日本の中でも最も最初に中国地方の過疎が始まった。そして、もっとも先鋭的に中国地方の過疎が進行した。全国の中で最もひどい状況。集落でなくなったところも少なくないし、そこまでいかなかったとしても、もう、年寄りばかりで、お祭りはおろかお葬式も出すのも難儀しているという集落がいっぱい出てきた。あるいはそこまでいかなかったとしても、若い人も若干いるんだけど、嫁さんが来ない。40いくつになっても独身と、だから青年部の集まりがあっても、嫁さんの話をするのはタブーだ、という集落もある。大変な状況になっている。

私は、仲間と相談し、中国地方地域づくり交流会という組織を作り、いろんなことをやったが、やはり根本的に地域づくりの哲学が必要ではないか、国づくりの哲学が必要ではないか・・・ということで、修道大学の香川学長などとも相談し、「哲学の道研究会」というものを作った。第一回は梅原猛さんをお呼びし、それから三回目だったと思うが、当時の時めく哲学者、中村雄二郎さんをお呼びした。

「先生、21世紀はどんな時代になるんですか？」と、聞いたら、先生は「リズムの時代になる」とおっしゃったが、講演会の最後に突然会場一杯に音を鳴らされた。それがベーレントの「天空の音楽」だったのである。私は確かにそれを聞いた。胎児は母親の腹の中でへその緒と繋がっている。腹の中で胎児が聞く音、それが「天空の音楽」である。大事なものはハーモニー。リズムと共振、それが中村雄二郎の「リズム論」だ。リズム、共振、ハーモニー、響き合いである。宇宙との響き合いだとか自然との響き合いだとか、そういう響き合い。人々との響き合い、大事なものは響き合いである。求めて、求めて・・・一目ぼれとか、なんか響き合うものがある。中村雄二郎は、私たち人間も、植物とも、花ともそういう響き合いがあるというようなことを言われている。

さあ、そこで、もっとも大事なことを申し上げておきたい。私たちすべての人間は、「胎児のときに宇宙の波動を受けている」という科学的事実である。このことをしっかり認識してもらわないと、これから先の話を進められないので、是非とも、私たちすべての人間は、「胎児のときに宇宙の波動を受けている」という科学的事実をしっかり認識しておいてもらいたい。

私たちは宇宙の「場」の作用を受けてこの世に誕生した・・・のである。

すなわち、宇宙には、いろんな波動があり、磁場、電場、重力場などの「場」をとおして、物質にある作用を及ぼしているが、私たちの脳もその作用を受けている。

3、「祈り」は「リズム」である

私の電子書籍「[祈りの科学シリーズその1](#)」は、「100匹目の猿現象」から始まって、私の論考は[最終章（第13章）](#)の「内なる神」まで進んでいくのだが、私の結論は、『「祈り」によって、「内なる神」が振動して「外なる神」と共振する。まさに、これはリズム現象である。「祈り」は「リズム」である。21世紀は、「祈りの時代」であり、また「リズムの時代」でなければならない。』という最終章の最後の言葉にある。

「内なる神」は、脳の中に存在する神で、[中沢新一のいうスピリット](#)がそうである。「モノ」には心、つまり魂の「タマ」、それにはスピリットの作用が働いているのであり、そのお陰で「内なる神」が振動するのであり、「内なる神」と「外なる神」との響き合いが起るのだ。

[第4章](#)で説明した通り、多くの可能性の中から、祈りは祈りの振動だけを選択しているのである。神経細胞ネットワークは祈りの振動だけを選択し、それを他の神経細胞ネットワークに伝えていくのである。その結果祈りが身体にいい結果をもたらすのである。このことは「内なる神」が祈りを聞き届けてくれたと考えざるを得ない。脳には「内なる神」が存在するのである。

ところで共鳴（共振）というのは一体になることだから、祈りの共鳴（共振）の場合、「内なる神」と「外なる神」と一体不可分な存在である。したがって、脳に「内なる神」が存在するとすれば「外なる神」も存在するのである。

なお、誤解があるといけないので、念のために申し添えておくが、人間というものは「内なる神」の存在する誠に不思議な動物だが、その秘密は「知恵の能」にある。

そしてその不思議な「知恵の能」をつくったのは、実は、「外なる神」である。「内なる神」があつて「外なる神」があるのではない。もともと「外なる神」がおわしますのである。[第11章](#)で説明したとおり、「外なる神」のつくったその不思議な「知恵の能」は、私たち人間はまだ一割ぐらいしか使っていないらしい。ほとんどのものがこれからの発達を待っているという。

私は、第4章で、「この神経細胞のネットワークにある選択性が固定的なものではなく柔軟性があるということは、誠に重要なことであるのでよく覚えておいてもらいた

い。」と申し上げたが、「知恵の能」は使い方次第であって、悪知恵を働かせてはならないし、ましてよほどのことでない限り「丑の刻参り」などをしてはならない。

「祈り」こそ大いに実践すべきである。私はこれからの時代は、「祈り」の時代であると思う。

「祈り」によって、「内なる神」が振動して「外なる神」と共振する。まさに、これはリズム現象である。「祈り」は「リズム」である。21世紀は、「祈りの時代」であり、また「リズムの時代」でなければならない。

4、コミュニケーションは「リズム」である

生物学的な意味での狭義の「共生」、それと「コミュニケーション（触れ合い）」と「ネットワーク（連携）」は、哲学的には同じことである。「共生」は傷つけ合うこともある得る状態。「コミュニケーション（触れ合い）」は意見が一致しなくていいからともかく相手の立場になって話を聞く状態。意見は一致しなくていい。「ネットワーク（連携）」は一部でいいから意見が一致して一緒に何かをやる状態。それぞれニュアンスの違いはあるが、哲学的には一緒で、これから21世紀は「共生社会」を目指そうと言ってもいいし、「コミュニケーション社会」を目指そうと言ってもいいし、「ネットワーク社会」を目指そうと言ってもいい。まあ、同じことだ。

私は先に「アイデンティティネットワーク」ということについて説明したが、自己の「アイデンティティネットワーク」と他者の「アイデンティティネットワーク」とがどこでどう響き合うのか？ 「コミュニケーション（触れ合い）」は意見が一致しなくていいからともかく相手の立場になって話を聞く状態。意見は一致しなくていい。相手の立場になって話を聞く状態にある時、私は、自己の「アイデンティティネットワーク」と他者の「アイデンティティネットワーク」との響き合いが起こっている。

すなわち、「コミュニケーション」は「リズム」である。

私たちは、日常的にしょっちゅう、仲間と大いに食い酒を飲んで、仲間との「コミュニケーション」を深めなければならない。

5、「編集」は「リズム」である

自己の中（脳の中）にあるアイデンティティーと外からやってきた情報との間で共振が起こり、記憶の再生が行なわれる。記憶の再生、それは脳の中で行なわれる編集ということである。松岡正剛はそのように編集というものを理解しているらしい。編集が「記憶の再生」であるとすれば、私は、この際、「編集」は「リズム」であると言い切っておきたい。ただし、「編集」というものの理解については、私に松岡正剛の認識以外のものはないので、全面的に松岡正剛の認識に従いたいと思う。では、「編集」の諸様相を、松岡正剛の「知の編集工学」（2001年年3月、朝日文庫）[その他の解説](#) から、ピックアップしておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hensama.pdf>

「記憶の再生」ということについては、私なりに勉強したことがあって、それを私の電子書籍「[書評・日本の文脈](#)」の補筆『[「こころ」とは何か？・記憶、学習、について](#)』に書いた。その中で、記憶の再生については、次のように述べた。すなわち、

『 大脳生理学や分子生物学の範囲の中では、いまのところこれといった新しい記憶の理論はないようで、そこで唯一新たな地平を切り開いているのが、量子場脳理論ということらしい。これは、1960年から70年代にかけて、二人の日本の物理学者・梅沢博臣と高橋康が場の量子論における「[自発的対称性のやぶれ](#)」という斬新な記憶の理論を提唱し、現在の研究に引き継がれているものです。』

『 記憶の想起ということは、そこに意識が発生するということであるから、記憶の想起と意識の発生ということは同じである。この記憶の想起（意識の発生）がどのようになされるのかを簡単にわかりやすく説明することは非常にむづかしい。「自発的対称性の破れ」という量子脳力学の理論ばかりでなく、ヒッグス・メカイズムという量子脳力学の理論も説明しなければならないので、ちょっと私の手には負えない。是非、私が教科書にしている「脳と心の量子論・場の量子論が解き明かす心の姿」（治部眞理、保江邦夫、1998年5月、講談社）を勉強していただきたい。』・・・と。

その説明では、記憶の再生ということがリズムであると述べている訳ではないが、梅沢博臣と高橋康の量子場脳理論によれば、記憶の再生というものが脳の中の波動現象つまりリズムであると理解することができるのである。

量子場脳理論の以上のような理解に立って、この際ここでは、記憶の再生はリズムであると言い切っておきたいと思う。

6、「形」は「リズム」である

形を認識するとき記憶の再生が起こっており、その記憶の再生というものは先述したように脳の中の波動現象に起因するものであり、私は、記憶の再生はリズムであると形はリズムであると言い切った。

ところで、形を認識する時、脳の中で何が起きているか？ 以下において、その点を説明した上で、形はリズムであることを説明したい。

自分の身の回りのすべて、これを環境と呼ぼう。環境には自分と関係のあるものないもの、或いは思い出のあるものないもの、創作意欲を掻き立てるもの掻き立てないもの、さまざまである。それら形を認識する時、同時に記憶の再生が行われて、自分との関わり合いが思い出される。その記憶はもちろん自分の経験の記憶がほとんどであるが、今西錦司のいうプロトアイデンティティーというものもある。

古い道具を見た時、同時に記憶の再生が行われて懐かしく感じるのである。ここで私がいちばん言いたいことは、そのことである。

なお、一般的に、中村雄二郎は形はリズムであると言い切っている(「デザインする意思」、中村雄二郎、エッセイ集成6、1993年、青土社)。[私はその点についていろんな場で申し上げてきている](#)ので、この際、そのことを申し添えておきたい。

第3節 「リズム論に基づく生活」について

1、リズム論に基づく生活とはどんな生活か？

中村雄二郎のリズム論からすると、私たちは、日常の生活において、どのような習慣を身につければいいか？ それを考えてみたい。

まずご理解いただきたいことは、『「祈り」は「リズム」である』ということである。私たち日本人の多くは、自宅の仏壇や神棚の前で祈る習慣がある。この習慣が大事であって、私は、この習慣によって日本人としての感性が養われると考えている。

自宅の仏壇や神棚の前で祈る場合、特定の宗教教義に関係なく、ただひたすら亡くなった者の成仏を祈ったり、先祖に守っていただくことを願ったりするだけである。これは日本の多神教の姿そのものである。日本らしい姿である。

自宅の仏壇や神棚の前で祈る日常生活を続ける中で、近所のお地蔵さんや道祖神や庚申さんに線香やお花を上げると良い。これも多くの人のやっていることである。

次に、これも多くの人が日常的にやっていることだが、仲間と飲んだり食ったり話し合ったりすることが重要である。コミュニケーションは響き合いであり、これは「リズム」である。したがって、その仲間が日本人であろうと外国人であろうと日本人としての感性が養われる。しかし、その仲間が日本人のみの場合、通常、多くの人は自己主張をしないので、日本人としての感性が養われる度合いが強い。

以上二つの事柄は多くの人がやっている通常的生活習慣であり、皆さん方に違和感はないだろう。しかし、これから述べることはやや違和感があるかもしれないが、私のやっている生活スタイルであり、「リズム論に基づく生活」の代表的なものがあるので、この際皆さん方にお勧めしたい。

(1) 文部省唱歌を歌うこと。

音楽がリズムであることは言うまでもない。したがって、音楽を聴き楽器を奏でることをしょっちゅうやっている生活はリズムに満ちた生活であり、大変良い。しかし、私として

は、歌を歌うこと、とりわけ文部省唱歌を歌うことをお勧めしたい。文部省唱歌を歌うことによって、日本人としての感性がしっかり養われると思うからだ。

言霊ことだまというのがある。「ことだま」については、梅棹忠雄はその著「美意識と神さま」のなかで次のように述べている。すなわち、

『ヨーロッパ人が言語的心霊主義者であるとすれば、日本人は、言語的無神論者である。日本人にとっては、言語をどのようにもてあそんでも、たたりもなく、害もない存在である。俳句のような言語遊戯が、民衆の、もっともポピュラーなあそびとなるゆえんである。俳句は、とにかくにもひとつの詩であろうが、そこには、詩神のやどり場所もない。』

『「ことだまさきはう」古代から、言語喪失の現代までのあいだに、何が、どう変化したのであろうか。』

『「ことだま」のやどり場所としての言葉というのは、じつは音声言語のことではないだろうか。声が必要なのである。』

『「のりと」はすべて、よみあげなければならないし、場合によっては、大声をだすだけでもよい。』

『スコットもバイロンも、自作の詩を劇場のステージに立って、朗々と朗読したのである。その伝統は、いまなおヨーロッパ各地にいきている。』・・・と。

大声で歌うことの重要性を強調しておきたいし、古代がそうであったように、和歌を大きな声で謡うことの重要性を指摘しておきたいのだ。是非、地域のおける「ことだま」を復活させよう。「リズム」は文化である。

言の葉（ことのは）という言葉は、古代語であり、単に言葉という意味で使われたり、和歌のことであったりした。私は「ことだま」が「こと」であり、それには神が宿っているのだと考えている。「ことのは」が言葉という意味で使われるときは、「は」は端（はし）の意味であるから、神が宿っているようなことはない。しかし、「ことのは」が和歌を意味する場合は、「言霊」のことであり、神が宿っている。したがって、和歌は、声大きく謡って神と交信するのである。お題目を大きく唱えるときも神との交信があり、禅宗の修行僧が托鉢のとき「おーおー」と唱えるときも神との交信がある。

ここでは、話の都合上、言の葉（ことのは）を広義に解釈し、和歌に限らず、作詞家によって選り抜かれた言葉とする。神に捧げる言葉、そんなニュアンスを持った心に滲みる歌を歌いたいものだ。一応、ここでは言の葉（ことのは）には神との交信があると考えて貰いたい。

文部省唱歌は、現在の言霊ことのはかかもしれない。心を込めて歌っていると、神との交信があるように思う。歌に関しては、少し思うところがあるけれど、今ここでは、以上のことだけを申し上げておきたい。

(2) 昔話を読むこと。

日本人としての感性を養うには昔話を読むことが良い。多くの昔話を枕元に置いておき、寝るときに読む習慣をつけると、その日に応じて適当なものを選択して読むことになる。[これは松岡正剛の言う編集であり、述語的行為である。](#)述語的行為を続けておれば自ずとリズム性の豊かな人間になっていく。

(3) 歴史的な場所に出かけること。

リズム論の「[場所性](#)」という論考で述べたように、「歴史のおもむき」や「自然のおもむき」の顕著なところにしょっちゅう出かけると良い。

日本人は、中村雄二郎に言わせれば、「述語の世界」に生きているということだが、よく言われるように、日本人はあまり自己主張をしない民族である。これは何故か???

岸本英夫によれば、それはどうも「自然環境に対する親近性」からくるらしい。彼は、『日本の住民は、自然と協力していればよかった。自然に身をまかせていれば、生きることができた。したがって、自然に対して、おのずから親しさを感じた。自然の恩恵に対して、感謝の態度を持つようになった。このようにして、自然に対する親近感が、基本的なパーソナリティ特性となったと考えられよう。』・・・と述べているが、そうなのだ。日本人の自然観は、「人は自然の一部である」というものであり、自然と対立するものではない。自然はさまざまな姿を持つが、その森羅万象のすべてが親近感をもって心の奥に感じられる感覚、それが中沢新一のいうスピリットだと思うが、そういう日本人の感受性、それは日本人の自然観から来ている。そういう感受性からは俺が俺がという自己主張は出てこない。対立よりも協調。いろんなものと「共振（シンクロナイズ）」することが大事なのであって、そもそも日本語は主語がはっきりしな場合が多いのである。要は、日本人の感受性も問題である。

以上の岸本英夫の考えの他、私は、「風土」の作用というものを考えてみたい。「風土」にメディオンが作用すればどうなるかという問題である。オギュスタンベルクは、「歴史のおもむき」とか「自然のおもむき」と言っているが、日本の場合、「歴史のおもむき」や「自然のおもむき」の指し示すところによって、人びとは共生を志向し、場の雰囲気としては仲間を大事にするようになる。すなわち、人びとの主体性がなくなる。日本の場合、「風土」というものの働きの結果、脱主体化が起こるのである。何故日本の場合にこういうことが起こり、西欧では何故こういうことが起こらないか？ それは、象徴的な場所の働きによるらしい。象徴的な場所の働きとは、歴史的に培われた人びとへの宗教感覚の刷り込み現象であるが、日本の場合、中沢新一のいうスピリットが関係している。。日本人としての感性が養われる。

以上のとおり、「自然のおもむき」の顕著なところにしょっちゅう出かけると良い。しかし、ここでは「歴史のおもむき」の顕著なところ、例えば、神社仏閣とか古代の遺跡のあるところにしょっちゅう出かけられることを、ここでは特に推奨しておきたい。象徴的な場所の働きがあるからだ。縄文遺跡などでは、[中沢新一のいう「スピリット」](#)に出会うかもしれない。

(4) 日本で使われた古い道具を愛でること。

論考「[中村雄二郎のリズム論におけるリズムとは？](#)」で述べたように、「形はリズム」であり、形を認識するとき、記憶の再生が起こっている。記憶の再生が起こっており、その記憶の再生というものは先述したように脳の中の波動現象に起因するものであり、私は、記憶の再生はリズムであると形はリズムであると言い切った。

自分の身の回りのすべて、これを環境と呼ぼう。環境には自分と関係のあるものないもの、或いは思い出のあるものないもの、創作意欲を掻き立てるもの掻き立てないもの、さまざまである。それら形を認識する時、同時に記憶の再生が行われて、自分との関わり合いが思い出される。

古い道具を見た時、同時に記憶の再生が行われて懐かしく感じるのである。ここで私がいちばん言いたいことは、そのことである。

古い道具を「民具」と呼び出したのは**渋沢敬三**である。そして、民具学という学問が、1921年(大正11)、渋沢敬三が中心となって東京三田の渋沢邸内において屋根裏博物館（アチック・ミュージアム）を作ったことに始まる。渋沢敬三は、民具は美しいが、それは個々の物がもつ美ではなく、物が集合したときに全体として美しさを感じさせるのだと言った。つまり、民具の美は常民の生活の持つ美しさが、物によって具現されているということであって、民芸のように物自体の美しさを云々するのではないというのが渋沢の考えだ。 そうなのだ。生活の持つ美しさ、それに私たちのアイデンティティーが揺すぶられるのである。私は、民具を楽しむことによって、日本人としての感性が養われると思う。

以上述べてきたとおり、私たち日本人は、日本人としての感性を身につけるために、日々、中村雄二郎のリズム論に基づく以上のような生活を習慣として続けることが大切であると思う。しかし、それだけでは、私は日本人として不十分であると思う。これからの国際社会において、日本人は、アメリカと中国との間に立って、その仲立ち的な役割を果たさなければならないと考えるからである。そこで私が思うには、私たち日本人は、リズム論に基づく生活が続けながら日本の精神を生き、かつ、同時に、「哲学的宗教」である道教にエールを送りながら「日中友好親善」を深めて行かなければならないのではないか。ヨーロッパアメリカ文明は、キリスト教も含めて終焉を迎えている。これからあるべき「哲学的宗教」は多神教でなければ世界はやって行けないと思う。日本の宗教は多神教だが、残念ながら哲学の裏打ちがない。中村雄二郎のリズム論はその端（はし）りではない。したがって、世界の人びとに日本人の宗教観を理解してもらうことは難しい。私たちにできることはせいぜい「哲学的宗教」である道教にエールを送ることぐらいだ。「哲学的宗教」である道教にエールを送ることによって、世界の人びとの老荘思想に対する認識が深まるばかりでなく、中村雄二郎のリズム論に対する認識も深まると思う。私は、今後さらに道教の教祖である老子の哲学について勉強し、中村雄二郎のリズム論との共通性を探っていきたいと考えている。皆さんも是非「哲学的宗教」である道教にエールを送っていただきたい。「哲学的宗教」である道教は世界最強の宗教である。

では、以下において、「哲学的宗教」について説明をしていきたいと思う。

2、「野生の思考」について

「祈りの科学」シリーズ（1）の「＜100匹目の猿＞が100匹」は、最新の科学的知見をもとに書いたものである。その結論は、「リズム」と「祈り」というものが極めて重

要であるということだ。そして、「リズム」をキーワードに人類学を発展させる必要があるとの観点からこのシリーズには「リズム人類学の進め」というサブタイトルをつけた。日本は本来「祈り」の国であり、「祈りの国につぼん」と称してよい。今後、日本は、そこに大いなる誇りと大きな自信を持って、世界平和のために尽力していかなければならない。

ところで、これからの日本復興に当たっては何よりも地域の自立を図ることが必要であり、パラダイムの転換が必要である。「祈りの科学」シリーズ（2）以下は、「祈りの科学」シリーズ（1）の知見にもとづいて、私の哲学なり思想の集大成として、今までにないまったく新しい価値観を論じたものであるが、2011年10月に私のもっとも尊敬する哲学者・中沢新一によって「野生の科学研究所」が誕生したので、「野生の思考」の重要性を意識して書いた。したがって、全体を貫くキーワードは「祈り」と「野生の思考」である。では、以下において、中沢新一の言う「野生の思考」について説明したい。

私は以前に、中沢新一の言っている「対称性社会の知恵」について書いたことがある。その中で、私は、「野生の思考」に関連して、次のように述べた、すなわち、

『 「対称性社会の知恵」に学び、2000年ミレニアムにおける哲学をつくらなければならない。中沢新一の「緑の資本論」や「モノとの同盟」は、そのための挑戦である。人類の知恵として、今後、どのような展開を見せるかは判らない。判らないのであるが、少なくともいえるのは、その方向に向かって、わが国は世界を引っ張っていく力をもっているし、したがって今後そのような国づくりをしていかなければならない。赤坂憲雄が中沢新一との座談で言うように（「東北学V o 1 5」、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2001年10月）、戦後処理というか戦争で自分がやってきたことを対象化できていない現状で、これをどうしてもやらないといけない。もちろんである。しかし、過去のことをきっちり批判するためには新しい物差しが必要でもあるし、そう意味で、中沢新一がその座談で言っているように、次の段階の再構築に入る時期にきている。いったん第二次世界大戦の歴史認識の問題は横に置いて、価値判断の基準となる哲学を確立する必要があると思う。その座談会で中沢新一は次のように言っている。私はまったく賛成である。

中沢新一いわく。「日本文化をとりかこむ事態は風雲急を告げてきていますので、もうそろそろ次の段階に取りかからなければいけない。日本人をどのように再認識し、その文化が人間を幸福にするものとなっていくために、次の段階の再構築に入る時期にきていると思います。」・・・と。

私は学者でない。政治家である。哲学のことなどよく判らないが、できるだけ勉強し、自分の言葉で考え、自分の言葉で語りながら、政治の方向を間違いのないようにしなければならないと思うのみである。国づくり、地域づくりの方向を間違いのないようにできるだけ気配りをしていかなければならない。それが私の一生の仕事である。「劇場国家につぼん」を提唱している所以である。大方の賛同をいただきたい。

さて、源氏物語を旅しながら、山口昌男のいうところの「両義性の論理」まで来た。これがどう西田幾多郎の哲学、私は「空の哲学」といっているのだが、その西田哲学とどう結びついていくのか。それはこれからの勉強であるが、私の直感としては、とにかく哲学に裏打ちされた新しい宗教が生れてこないと2000年ミレニアムの展望は開けてこないように思う。多くの哲学者に期待するところ誠に大である。

ではここで中沢新一の言うところの「対称性社会の知恵」について勉強しておきたい。「対称性社会の知恵」については、中沢新一がその著書「熊から王へ」(講談社、2002年6月)の中で述べており、それを私の言葉で紹介しておくというわけだ。もし私の言っているところに間違いがあるとすれば、それは私の理解不足からくるところからくるものであって、それはすべて私の責任である。

認知考古学という学問分野がある。その認知考古学によれば、われわれ人類は、3万年前の旧石器時代に脳組織に大変化をきたす。脳細胞の構造的変化で、ニューロンの新しい組織化というのだそうだが、そういう生体学的大変化はその後一度も起こっていないのだそう。だから、我々人類は、今のホモサピエンスになったときから3万年以上もその知的能力はそのままできているというのだ。では何が世の中を根本的に変えてきたのか。

形而上学的に言えば、二度の革命的変化があるという。第一次が一神教の成立がもたらした宗教によって思考のしかたが変り、思考能力がある程度セーブされた。自由奔放な流動的知性というものが、これを中沢新一はレヴィ・ストロースに敬意を表して「野生の思考」と呼んでいるが、そういう自由奔放な流動性知性がある程度「宗教」によって抑制されたということだ。それがルネッサンスによって解放され、「野生の思考」は装いも新たに「科学」として復活をとげたのである。それが形而上学的な意味での第二次の革命的大変化である。

中沢新一の考えによれば、3万年もの永い間、王という権威のある権力者はいなく、権威と権力は峻別され、権威の担い手である首長と権力的な側面を持つシャーマンないし戦士のリーダーは峻別されていた。そして、思考のしかたも自ずと「野生の思考」と「宗教的思考」に分かれており、「冬の祭り」にも見られるように、「野性の思考」は日常的生活を支配し、「宗教的思考」は非日常的生活を支配していた。それらの違いははっきりしているが、違いを認めつつ思考は流動的である。それは、山口昌男のいう「両義性の論理」に通底するものがあるのであるが、中沢新一はそれを「対称性社会の知恵」と呼んでいる。

ちなみに、現在の科学文明社会は、いうまでもなくアメリカを中心とする「非対称性社会」であり、一神教は、国内はともかくグローバルな世界において、科学文明という「野生の思考」を抑制することはできなくなっている。私は、違いを認めつつ思考は流動的でなければならないと考えているが、多分、中沢新一の「非対称性社会の知恵」というのも、山口昌男の「両義性の論理」もまあ同じようなものであろう。

これからどうすればいいか。中沢新一は次のように言っている。すなわち、「第三次の形而上学的革命がどのような構造をもつものであるか、おおよその見通しをもつことができる。それは、今日の科学に限界付けをもたらしている諸条件（生命科学の機械論的凡庸さ、分子生物学と熱力学の結合の不十分さ、量子力学的世界観の生活と思考の全領域への広がり阻んでいる西欧型資本主義の影響力など）を否定して、一神教の開いた地平を科学的思考によって変革することによってもたらされるであろう。」・・・と言っている。そうだ。そうなのだ。まったく中沢新一の言うとおりである。中沢新一や延原時行をはじめ多くの哲学者にその新たな地平を切り拓いてもらいたいものだ。

中沢新一は、一神教の開いた地平を科学的思考によって変革することによってもたらされるであろうというだけで、それ以上のことは具体的にいつていないのであるが、私は・・・、一神教の開いた地平を科学的思考によって変革することによってもたらされるであろう、・・・その新たな地平には、仏教なりキリスト教なり既存の宗教が科学によって装いも新たに息づいている世界が展開されているであろうと考えている。私は、装いを新たにしたその宗教を「哲学的宗教」と呼びたいと思う。』・・・と。

3、「哲学的宗教」について

[「対称性社会の知恵」](#)という文章の中で、私は、「哲学的宗教」について、次のように述べた、すなわち、

『 ちなみに、中沢新一のいう「宗教的思考」は、「思考」が宗教的な側面を持っているということであって、宗教そのものではない。哲学的にみて意味のある考え方のことである。したがって、私のイメージする将来あるべき「宗教的思考」とは、学者とりわけ哲学者にも支持されるような宗教がもっている考え方と同じような考え方といつていいようなものである。したがって、多くの人がそういう宗教をもたなければならないと考えているわけではない。必ずしも宗教にこだわっているわけではない。しかし、そういう「哲学的宗教」が新たな地平を切り拓いていくであろう予感を持っている。つまり、新たな地平というものは哲学者と宗教家の働きがあつてはじめて切り拓かれていくものであろう。どちらが欠けてもいけない。

哲学は理論である。宗教は実践である。実践にもとづく「直感」が大事である。超越者に対する「直感」が働くような実践がないといけないと思う。理論と実践・・・、それが「哲学的宗教」である。「哲学的宗教」は宗教的哲学者と哲学的宗教家の活躍があつてはじめて一般的な宗教となるのであろう。その理論と実践の仕方は違うであろうが、双方とも専門家であるが故にそれなりのレベルのものが身につけていなければならない。しか

し、一般大衆は、事情がまったく異なる。一般大衆は、専門家ではないので、理論も実践もほどほどのものであってやむを得ない。しかし、宗教であるから、理論ははともかく、実践は・・・、一般的なものであるにしても、それなりの「試練」というか「受苦」は必要であろう。そこがもっとも肝心な点である。もちろんその実践は非日常的であってよい。私は、非日常的に「自然」の中で宇宙との「響き合い」を実感する・・・、そのことが大事であると考えている。すなわち、「対称性社会の知恵」は・・・、理屈によってではなく、宇宙との「響き合い」という体験の積み重ねによって身に付くものと考えているのだ。修験道もよし。山登りもよし。これらは今の人びとや自然とのコミュニケーションだが、この他、時空を超えた人びと及び文化とのコミュニケーションもきわめて大事なことだ。ともかく宇宙との「響き合い」をできるだけ数多く経験することだ。そのための場所づくりが望まれる。』・・・と。

日本は、仏教が神道と習合してきた歴史があるし、道祖神その他の土着の宗教が今なお息づいているし、まさに多神教の国である。私たちはどんな神に「祈り」を捧げることができる。中国にその起源を持つ庚申信仰も今なお盛んであるし、道教の媽祖廟や関帝廟にお詣りする人も少なくない。「にゃんにゃん」の祠もあちこちに残っている。日本はまさに多神教の国なのである。これは世界に誇っても良いことだと思う。しかし、日本人の宗教心を世界の人びとにご理解いただくためには、日本人の宗教心に関する哲学的な説明が必要である。中村雄二郎のリズム論がその端（はし）りである。これを発展させて日本版「淮南子」まで辿り着かなければならないが、それには歴史的な時間が必要だ。したがって、ここ数百年の間、「哲学的宗教」としては道教しかないのではないかと私は思う次第である。

そこでこれから大事なことは、中村雄二郎のリズム論を発展させることである。そのためには、多くの人が「野生の思考」に関係のある思想や哲学を書いていく必要がある。[「対称性社会の知恵」という文章](#)の中で、私は、そのことについて、次のように述べた、すなわち、

『 中沢新一が言うように、熊を主題とする神話的思考、これは「対称性社会の知恵」の源泉であるが、この神話的思考の変奏曲は、北東アジアからアメリカ大陸にまでの広大な空間にまたがって・・・さまざまな形で存在し、またそれは歴史的にも一万年以上にわたっての永い永い時間にわたって存在し続けているのである。東北でも、その変奏曲の一部が風土となって今なお息づいている。その代表は宮沢賢治であるし、盤司盤三郎などの民話や伝説である。三内丸山遺跡や大湯のストーンサークルなどの遺跡も何かを語りかけてくる。私たちは、それら東北の風土から神話的思考の変奏曲に耳を傾け、感性を磨き、「対称性社会の知恵」を自分のものとして身につけていかなければならないのである。』

「哲学的宗教」は、「冬祭り」を基本にして、新しい哲学でいろいろと着飾られなければならない。先の述べたように、「冬祭り」の基本は、次のとおりである。

①「冬祭り」はタマ再生の祭りである。祭りの目的はタマ再生である。おのれの魂と触れ合って、おのれのタマを再生させ、「野生の思考」を抑制する力をふたたび得ることにある。

②「冬祭り」は仲間といっしょにある種の試練を受けることによってその宗教的な準備が完了する。これでやっと宗教的な意味を持った行事が執り行えるのだ。「受苦」によってある種の直感が働くようにならなければ宗教的な意味合いはないということだ。

③「冬祭り」は神歌や神話を教えてもらって「対称性社会の知恵」をマスターしていく資格を得る。「非対称の知恵」とは「野生の思考」と「宗教的思考」との流動性を確保することである。

④「冬祭り」は「人食い」の行事が必要不可欠だ。動物的な行為を行なって人間的な行為というか日常的な生活を否定することが重要だ。精神的には動物になりきらなければならない。

このような基本的事項を踏まえながらどのような宗教体験をすればいいのか。一般大衆が・・・ということである。これからの宗教は、私のいう「哲学的宗教」のことであるが、これからの宗教は科学的な装いも新たに再出発するであろうが、それを一般大衆が体験する「場所」を用意しておかなければならない。このように考えたとき、私は、東北の徳一がなぜか光り輝いて見えてくる。私の耳にはインディアンラブコールならぬ・・・はるかなる・・・「古代からの呼び声」が聞こえてくる。宇宙のリズムが山々にこだましている。「徳一読経の声」もかすかに聞こえてくるようだ。東北を勉強しなければならない。徳一を勉強しなければならない。神と仏と山々と・・・、東北こそ「哲学的宗教」を体験し得る「場所」として・・・もっともふさわしいのではないか。これからの国土づくりの大きな課題ではなかるうか・・・、そんなことを思いながらこれから東北の旅を始めたいと思っている。

私の・・・東北の旅は・・・、数年前にその出発点・「山寺」に立ったのはいいけれど、行く先もわからないまま思案に暮れていた。でもようやく旅の目標が定まったようである。とりあえず、「盤司盤三郎」の形跡を訪ねるところから始めよう。徳一はあとだ。徳一の勉強をしながら、東北の山も歩いてみたいものだ。東北の旅は万年の旅である。そこには・・・、はるかなる・・・「古代からの呼び声」が聞こえてくるものと思う。宇宙のリズムが山々にこだましているものと思う。まことに楽しみなことである。』」・・・と。

以上のとおり、私たち日本人は、リズム論に基づく生活を続けながら日本精神を生き、かつ、同時に、「哲学的宗教」である道教にエールを送りながら「日中友好親善」を深めて行かなければならないのではないか。ヨーロッパアメリカ文明は、キリスト教も含めて終焉を迎えている。これからあるべき「哲学的宗教」は多神教でなければ世界はやって行けないと思う。日本の宗教は多神教だが、残念ながら哲学の裏打ちがない。中村雄二郎の

リズム論はその端（はし）りではない。したがって、世界の人びとに日本人の宗教観を理解してもらうことは難しい。「哲学的宗教」である道教は世界最強の宗教である。「哲学的宗教」である道教にエールを送りながら、私たちのやれることをやて行こう。これから大事なことは、中村雄二郎のリズム論を発展させることである。そのためには、多くの人が「野生の思考」に関係のある思想や哲学を書いていく必要がある。

4、「野生の思考」に関連して

私は、今、「これから大事なことは、中村雄二郎のリズム論を発展させることである。そのためには、多くの人が「野生の思考」に関係のある思想や哲学を書いていく必要がある。」と述べた。私は、今後多くの人によって「野生の思考」に関係のある思想や哲学が書かれることを大いに期待しながら、今ここでは、「野生の思考」と関係のある思想や哲学を私なりにピックアップしておきたい。

(1) 中沢新一のいう「東北」の重要性：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/2honjin.html>

(2) 「空」の仏教哲理：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/ku/seire00b.html>

(3) 「モノ概念」の重要性：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/3gainen.htm>

(4) 摩多羅神についての特論・・・エロス神との関係：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/eros12.pdf>

(5) プラトンのエロス：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/eros08.pdf>

(6) 呉善花（お・そんふあ）の流動的知性：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/ryu/oryudou.html>

(7) 宮沢賢治：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/miyahoke.pdf>

(8) 草野心平：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kusanosi.pdf>

第3章 無について

第1節 無の哲学について

無という言葉にはその使い方に混乱がある。すなわち、無という言葉にはいろいろな意味があるが、私は、西田幾多郎の絶対無に限定して無という言葉を使いたいと思う。したがって、私が無心という時、世俗的なものに一切とらわれない心境を指している。特別の修行をした名僧などは別として、私たち一般の人間は、世俗的なものに一切とらわれない無心の心境になれることは通常ない。ただし、神に祈りを捧げる時、その祈り方にもよるが、無心の心境になって祈りを捧げることは可能である。

哲学において「無」という場合は、存在すなわち有、に対する無であって、相対的な二次的概念である。これに対し絶対無とは、存在論を超える。

西洋の思惟では無が有より軽んぜられたことは、「無」がBeingに対して常にNon-beingとしかいわれない、という言語的な事実にその証拠を見出す事が出来る。つまり、一般的に通用する言葉として無という言葉がないのである。もちろん、西洋の思惟からの制約を離れて本来的な「無」を表す言葉がない訳ではない。しかし、一般的に通用する言葉ではない。無というものの概念が人々の共通認識として定着していない。

一方、東洋では無を強調し、有中心の非-有(Non-being)、を超えた意味合いを含ませた。東洋的無の思惟が（無の）心を重んじるに対し、西洋的な有の思惟において重んじているのは、知である。

純粋な絶対有はそのあまりの純粋さのために無内容性を持つという観点から行なったハイデッガーの晩年の研究がある。

一方、経験から遊離した思弁的な形而上学を攻撃した[ルドルフ・カルナップ](#)は論文「言語の論理的分析による形而上学の克服」において題名どおり形而上学を批判し、その中で「無」を不用意に、きちんと考えずに扱う哲学者たちを以下のように批判した。

その中で彼は文字通り「無」という概念は元来は「～でない」という否定を不当に名詞化しているだけであるとした。そして、彼によれば、そのような誤りは一見したところ「無」はその形が普通の名詞と同じであるために、形而上学者が言語を混乱して用いてしまうために起こるものであるらしい。また、彼は「無が無化する」のような形而上学的命題は分析的にも総合的にも検証ができないがゆえにナンセンスであるとした。

このようにして、カルナップは、ハイデガーをはじめとした「無」なるものを不用意に、きちんと考えずいいかげんに扱う哲学者を批判した。

このように、無の哲学は西洋ではまったくの未熟であると言っているのではないか。それに対して日本では、西田幾多郎によって無の哲学が基礎づけられたし、今後、いくつかの課題を解決して、西洋に通用する無の哲学が完成する可能性は高い。無の哲学こそこれからの世界にあるべき哲学であると思う。

第2節 空について

私は、日本の歴史と伝統文化の象徴が天皇だと考えており、その心髄は空（くう）にあると考えている。そういう観点から天皇について勉強し、「空（くう）」について勉強してきた。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/ku/index.html>

私は、私なりに「空（くう）」の勉強をしてきたが、いろんな本を見てみても、「空」は満ちているのだと書いている本はほとんどなく、私の知る限り、仏教の心髄を判りやすく熱心に説いてくれている人はダライ・ラマや中沢新一のほかあまりいないようだ。

「ダライ・ラマの般若心経」（大谷孝三<文>、菊地和男<写真>、2004年9月、ジェネオン・エンタテインメント）という本に紹介されているように、ダライ・ラマは「空は形あるものを生成させる基盤となる。」と言っている。また、中沢新一はその著書「精霊の王」のなかで「空（力の充溢した空間）」と言っている。そうなのだ。「空」は満ちているのである。

仏教にもさまざまな宗派があるが、その源流を辿るとお釈迦さんに行く。「空（くう）」は、仏教の心髄であると同時に参禅などの体験は難しくても、お寺に宿泊して和尚さんから「空（くう）」の話しを聞くツアーなどは実現可能だ。妙心寺の大心院には毎年ポートランドの高校生が合宿にやってきて、毎朝和尚と一緒に『般若心経』を読むのだそうだ。そして、精進料理を食べ、茶道のまねごとをする。生け花を鑑賞し、日本庭園を鑑賞する。そういうお寺での体験はきっと好評にちがいない。

日本の仏教は殆どすべて大乘仏教に属するものであるが、大乘仏教の根本思想は「空（くう）」の理法をさとることであると言われていた。「空（くう）」の理法は、詳しく説けば限りがなく、『大般若経』六百巻のようなものもあるが、簡単には、『般若心経』の中におさまると言われている。そのために、この『般若心経』は、日本の各宗派で熱心に読まれている。しかし、浄土宗と浄土真宗では読まない。浄土教では往生に必要なのは「南無阿弥陀仏」の念仏を唱えるだけで十分であり、『般若心経』は不必要と考えているためだ。

ここで注意してほしいのは、浄土宗や浄土真宗が『般若心経』を読まないからと言って「空（くう）」の理法を否定している訳ではないということだ。したがって、浄土宗や浄土真宗もそれぞれの立場で「空（くう）」を語ることはできる。

京都大学名誉教授で梶山雄一という大先生がいて、その先生が「空と浄土」というテーマで語っておられるので、大変難しい内容であるが、ここではそれを紹介することとしたい。ホワイトヘッドというところの「永遠的对象」と同じようなものであるのかどうか、まだまだ私の勉強すべき事柄が多そうだ。

<http://h-kishi.sakura.ne.jp/kokoro-212.htm>

要点は次の通りである。

- * 龍樹は、「この世は夢であり、幻である」と考えた。「全てのものは、実は本質が空なものであり、そして全てが仮名(けみょう)だ」と。「仮に名付けられた」、言い換えれば、「言葉だけのもの、概念だけのものを、我々がかってに実体があるんだ、と思っているに過ぎないんだ」と。
- * それが、『般若経』であり、龍樹の思想であった。その考え方が曇鸞にも、或いは、その後の法然や親鸞というような人にも受け継がれている。
- * すなわち、「浄土教というものの中にも、そういう空の思想が流れているんだ」ということを申し上げたい。

先ほども申し上げたように、「空（くう）」は、仏教の心髄であると同時に日本文化の心髄でもある。したがって、外国観光客に日本文化の心髄を判っていただくには、何んとしても「空（くう）」を語らねばならない。しかし、「空（くう）」を語るのは大変難しい。専門家が少ないということだ。したがって、観光関係者で文化観光研究会を作り、素人なりに文化の勉強や宗教の勉強を重ねていくことが必要かもしれない。その上で、私としては、お寺さんに文化観光の一翼を担っていただくよう働きかけていきたい。

寺は、貴重な地球的、宇宙的空間である。貴重なジオ的空間と言って良いだろう。おおいに「空（くう）」を語ってもらいたいものだ。

第3節 無と空は同じか？

無が空と同じかどうかという問題について、私の浅学の故だろうが、納得のいく説明にお目にかかったことがない。この問題は大変難しい問題であるようだ。私の能力を超えている問題であると思うけれど、そこは恥を忍んで私の思うところを述べることにしたい。無は、第1節で述べたように、私は、西田哲学における絶対無の意味で使っているので、ここでは、無が老荘思想における道のことであることを説明する。その上で、無が空と同じであることを説明したい。

2013年8月のNHKテレビテキスト「100分de名著」において、東京大学名誉教授の蜂屋邦夫が、老荘思想の「道」について次のように解説している。すなわち、

『 「有」と「無」とはどちらも「道」の活動である。』

『 「無」と「有」を対比させながらも、「無」と「有」は究極的には同じもの、つまりどちらも「道」である・・・という記述が「老子」にはよく登場します。』

『 結局、その「道」から、あらゆるものが生まれてくる、と老子は言っているのです。』

『 「無」といっても、そこになにもないという意味ではなく、何物であるかが規定できないから「無」といっているだけなのです。「こういうものが存在します」と明言すると、その存在に限定されてしまうので、一切合切を包括するものとして「無」という言葉を老子は使ったと考えるべきでしょう。』

『 老子は「無」というものを、なにもないのではなく、ありとあらゆる可能性を含みもつ状態だとしているのです。』・・・と。

なお、参考のために、蜂屋邦夫の「老荘を読む」（1987年7月、講談社）並びに「老子」（2008年12月、岩波書店）という本から「無」に関連する記事を紹介しておきたい。

蜂屋邦夫は、「老荘を読む」では『「無己」「無功」「無名」とは、世俗世界での自己主張、行動、評価などを、いずれも超えている、ということであろう。』述べているし、「老子第37章」では「道常無為」「而無不為」「無名之撲」「夫亦将無欲」という言葉について「無」というものを考える場合のヒントを与えてくれている。これらを読んでも「無」とは「道」と同じ概念であり、宇宙の原理をひとつの言葉で言い切ったものである

ことが判るだろう。老荘的世界は捉えないような「無」の世界であるが、それは「有」の世界、すなわち世俗の世界と切り離して考えるわけにはいかない。「道」とは、「有」と「無」とを包含したものである。そのことについては、金谷治の「淮南子（えなんじ）の思想・・・老荘的世界」（1992年2月、講談社）という名著があるので、是非、皆さん方にはそれを読んでもらいたい。

さて、2の「空について」で述べたように、ダライ・ラマは「空は形あるものを生成させる基盤となる。」と言っているし、中沢新一も「空（力の充溢した空間）」と言っている。そして、蜂屋邦夫が「100分de名著」で解説しているように、老子は「無からあらゆるものが生まれてくる」と考えている。したがって、「空」と「無」とは同じことであると言い切って良いと思う。

第4節 私たちはどうすれば無の心境になれるか？

私たち普通の人間は、無心に祈っている時だけしかそういう心境になれるのではないか？

ただし、その前提として、自己を超越する、すなわち脱主体化が必要で、中村雄二郎のリズム論に基づく生活を続けることが不可欠である。

その理由は、我思う故に我ありというデカルト哲学に基づく限り、あくまでも自己が中心で、脱主体化ということはある得ない。脱主体化の哲学、それは中村雄二郎のリズム論である。したがって、脱主体のためには、中村雄二郎のリズム論に基づく生活をす必要があるのである。リズム論に基づく生活については、第2章に書いたとおりである。しかし、そこでは無との関係で少し書き足らなかった点があるので、この際ここで、無心に祈ることとリズムとの関係を説明しておきたい。冒頭に述べたように、私たちが神に祈りを捧げる時、その祈り方にもよるが、無心の心境になって祈りを捧げることは可能である。

無心という言葉の意味はいろいろあるが、無心に祈るという場合の無とは、ここで問題にしている「無」であって、冒頭に述べたように西田幾多郎の絶対無のことである。

無心に祈っていると何故心が安らかになるのか？ これは科学的事実だろうと思うが、それを中村雄二郎のリズム論と結びつけて理解することは大変難しい。私は、第2章第2節の5で記憶の再生が波動現象、つまりリズムのなせるわざであることを説明した。その説

明は、「脳と心の量子論・場の量子論が解き明かす心の姿」（治部眞理、保江邦夫、1998年5月、講談社）によっているが、その本は私の教科書になっており、私の電子書籍「[書評・日本の文脈](#)」の補筆『「[こころ](#)」とは何か？・記憶、学習、について』でその詳細を紹介した。その教科書から今ここで必要なことをピックアップして見よう。その教科書では次のように述べられている。すなわち、

『量子脳力学では、外界からの刺激やそれに対する意識の印象も含めた内的な刺激も、最終的に細胞骨格や細胞膜のなかに作られる大きな電気双極子の形にまで変形された後、その近くの水の電気双極子の凝集体として安定に維持されると考えている。』

『水の電気双極子の形は、大きな耳を付けたミッキーマウスのような形をしているので、水の電気双極子をミッキーマウスの顔と呼ぶ。』

『外部の刺激や内的な刺激に応じて、ミッキーたちはシンクロナイズスイミングのような華麗な集団演技をやっているらしい。』

『生物が死んだ場合、ミッキーたちの動きがだんだんとバラバラになっていき、だんだんとダイナミカルな秩序が消えていってしまうらしい。』

『量子の世界のミッキーたちは、量子電磁場の調和のとれた美しい波動、華麗な光の「音楽」にあわせて、素晴らしいシンクロナイズスイミングの集団演技を披露してくれるのです。』

『大脳生理学や分子生物学の範囲の中では、いまのところこれといった新しい記憶の理論はないようで、そこで唯一新たな地平を切り開いているのが、量子場脳理論ということらしい。これは、1960年から70年代にかけて、二人の日本の物理学者・梅沢博臣と高橋康が場の量子論における「自発的対称性のやぶれ」という斬新な記憶の理論を提唱し、現在の研究に引き継がれているものです。』

『脳の組織の中には、形態としては複数の脳細胞の集団なのですが、機能的には一塊の水の電気双極子の凝集体の中に有機的に取り込まれていると考えられる組織で、50マイクロメートル程度の空間的な拡がりを持つものがあり、記憶を含めた高度な脳の機能を生み出している。』

『新たな刺激によりその凝集体のある部位の細胞骨格や細胞膜の生体分子が電気双極子を持つようになった場合に、凝集体の中に南部・ゴールドストーン量子であるポラリトンが発生する。』

『このポラリトンの生成を意識する主体こそが「こころ」と呼ばれるものの実態なのです。』

『「こころ」のほんとうの姿は脳の中に拡がる無限個の光子のそのものであり、その運動状態が変わるといふこととして理解できる。』

『場の量子論というのは、宇宙全体に適用される一般的かつ普遍的な理論体系だが、脳の中のミクロの世界にも適用できる統一的な物理法則であり、脳に関する物理的な学問は量子脳力学と呼ばれている。そして、量子脳力学では、生命というもの、記憶や意識というもの、そして心の実態というものが、物理的に理解されるようになってきている。』

『記憶とは、体験のことである。記憶や意識というもの、そして心というものは、物理現象以外の何ものでもない。ということは、体験というものがすべての始まりであるということだ。胎芽時代の体験、胎児時代の体験、幼児時代の体験、子供時代の体験、青年時代の体験、壮年時代の体験、老年時代の体験それぞれが大事である。それぞれの体験によって「心」というものが形成されて育っていく。はじめから「心」というものがある訳ではない。』

以上で大事なものはミッキーマウスと呼ばれる光子である。量子能力学では、光子は波動と考えられているので、ウォータースイミングの集団演技としての動きが問題である。その動きは、私が思うに、その人の体験つまりその人のアイデンティティーによってさまざまである。産まれたばかりの赤ん坊は、純粹無垢で100パーセント乱れがない。それと同じように、無心に祈っている時は、ミッキーマウスが行う集団演技の動きに乱れがまったくない。心配事や邪念が増えると、その乱れは大きくなっていく。病気になって死にそうになると、安定化しようとする力がなくなって、遂には死んでしまう。生きている状態というのは、ミッキーマウスの行う集団演技の動きが多少乱れても、それを安定化しようとする力が働いている状態である。

この不思議な波動の世界を説く鍵は、ミッキーマウスと呼ばれる光子である。量子能力学では、光子は波動と考えられているので、ウォータースイミングの集団演技としての動きが問題である。その動きというのは、リズムである。赤ん坊のように純粹無垢の状態になること、それができるのは、私たちの場合、無心に祈る時だけである。通常は、第2章第3節に書いた中村雄二郎のリズム論に基づいた生活をするにすぎることしかできない。通常はそうだが、時には無心に祈ることもやってみたいものだ。

おわりに

私は「はじめに」で次のように述べた。すなわち、

『 佐伯啓思の主張する「シヴィック・リベラリズム」、すなわち「共和国の精神」というものを十分認識した上で、私たち日本人は、日本の精神を外国人に語らねばならないと思う。私たちは、歴史的にずっと仏教や神道を信仰してきて、日本の精神を作ってきたのだ。では、日本の精神とは何か？ そこが問題の核心である。日本の精神をひと言で言えば、「脱主体化」、すなわち自己主張しないことである。それが何故立派なことであるのか、西欧人には理解されなくとも、今後は、私たち日本人はそれを十分理解した上で、西欧人に判ってもらおう努力をする必要がある。』

『 この「日本の精神」に関する哲学としては、佐伯啓思のいうとおりにかつての西田幾多郎の「無の思想」があるが、比較的最近のものとしては、私の尊敬する中村雄二郎の「リズム論」がある。佐伯啓思や呉善花は中村雄二郎の「リズム論」にはまったく触れていないので、私は、以下において中村雄二郎の「リズム論」について詳しく述べていきたい。そこでは、中村雄二郎の「リズム論」の世界性を述べることになる。また、佐伯啓思が「日本の精神」との関連で触れている「無」についても、その世界性を述べるとともに、中村雄二郎の「リズム論」と西田幾多郎の「無の思想」との繋がりを明らかにするつもりだ。』・・・と。

私は第3章で「無」について述べた。無の哲学は西洋ではまったくの未熟であると言っていい。それに対して日本では、西田幾多郎によって無の哲学が基礎づけられたし、今後、いくつかの課題を解決して、西洋に通用する無の哲学が完成する可能性は高い。無の哲学こそこれからの世界にあるべき哲学であると思う。

私たち日本人は、リズム論に基づく生活を続けながら日本の精神を生き、かつ、同時に、「哲学的宗教」である道教にエールを送りながら「日中友好親善」を深めて行かなければならないのではないか。ヨーロッパアメリカ文明は、キリスト教も含めて終焉を迎えている。これからあるべき「哲学的宗教」は多神教でなければ世界はやっていけないと思う。日本の宗教は多神教だが、残念ながら哲学の裏打ちがない。中村雄二郎のリズム論はその端（はし）りでしかない。したがって、世界の人びとに日本人の宗教観を理解してもらうことは難しい。「哲学的宗教」である道教は世界最強の宗教である。「哲学的宗教」である道教にエールを送りながら、私たちのやれることをやっに行こう。これから大事なことは、中村雄二郎のリズム論を発展させることである。そのためには、多くの人が「野生の思考」に関係のある思想や哲学を書いていく必要がある。

私は、今後多くの人によって「野生の思考」に関係のある思想や哲学が書かれることを大いに期待しながら、第2章第3節に、「野生の思考」と関係のある思想や哲学をピックアップしておいた。それらは、これからあるべき哲学を見据えての私の勉強の成果であるが、こういった勉強はこれからも引き続き続けて行きたいと思う。それらの成果は以下のとおりである。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/aratana.pdf>